

# 原 平 遺 跡

1999.3

山梨県教育委員会  
日本道路公団東京建設局

# 原 平 遺 跡

## 序

本報告書は中央自動車道拡幅工事に先立ち、本年度発掘調査された大月市原平遺跡について、その成果をまとめたものであります。

中央自動車道は、首都圏と中部・京阪神を結ぶ大動脈として、流通やレジャー普及に伴い年々交通量が増加しているため、上野原～大月間の拡幅工事が実施されております。この拡幅部分には、上野原側から南大沢遺跡・長峰岩跡・強灘北遺跡・安楽寺東遺跡・原平遺跡という五つの遺跡が確認されておりました。当センターでは、すべての遺跡について今年度までに調査を終了し、現在報告書作成に向けて鋭意整理作業を進めております。

本報告書でまとめた原平遺跡は一番最後に調査されたもので、調査幅約10m、長さ約120mを対象としております。本遺跡は昭和59年に工場誘致に先立つ事前調査として約3万m<sup>2</sup>が発掘調査され、縄文時代早期末の下吉井式期の住居跡約60軒が確認されたことで話題になりました。下吉井式期の集落としては、未だにこれを凌ぐ住居跡のまとまりは確認されていないことから最大規模の集落であると言えます。また、住居跡内から出土したパン状炭化物も国内最古の資料として極めて貴重であります。このように本遺跡は全国的によく知られた遺跡であり、今回の調査域の隣接地も市教育委員会により2年前に調査されております。

今回の調査は、原平遺跡の末端部分であったため、遺構についてはそれほど濃くはないものと予想しておきましたが、狭い範囲であるにもかかわらず、下吉井式期の住居跡6軒と平安時代の住居跡2軒、さらに土坑150基あまりが確認されました。とくに下吉井式期の住居跡は、原平遺跡の集落本体部分につながるもので、予想以上に集落の規模が大きいものであることを明らかにしたことになります。また、遺物では土器は少ないものの、各住居とも豊富な礫器が確認され、水晶製石鎌なども出土しました。近接の都留市中溝遺跡(既報告)でも同様の内容の集落が確認されており、山梨県東部城が該期の大きな拠点であった事が窺われます。

本報告書が多くの方々の研究資料としてご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、ならびに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

## 例　　言

- 1 本報告書は、本年度に中央自動車道拡幅工事に先立ち発掘調査された、大月市原平遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、日本道路公団東京建設局の委託を受けて山梨県教育委員会が実施した。
- 3 本遺跡は、日本道路公団東京建設局と県教育委員会との間で、西の上C遺跡の遺跡名で発掘調査の委託契約が行われた。しかし、その後、西の上C遺跡は沢を隔てた別の地点であることが判明し、かつ、今回の調査地の隣接地が大月市教育委員会により原平遺跡として調査されていることおよび地籍が原平であることから、不必要な混乱を避けるために、この正報告では原平遺跡の名称を用いる。また、この正報告の内容もこれまで大月市教育委員会により調査してきた原平遺跡と同一の遺跡であるという認識に基づき執筆したことを明記する。
- 4 発掘調査および出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターで行い、長沢宏昌・崎田哲が担当した。
- 5 本報告書は、第Ⅱ章第2節を崎田が、第Ⅲ章第4節を保坂康夫が、それ以外の執筆と編集を長沢が行なった。また、第Ⅳ章の自然科学分析は㈱パリノサーヴェイによる。
- 6 写真撮影は、遺構・遺物とともに長沢・崎田が行った。
- 7 本報告書にかかる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 発掘調査および本報告書の作成に当たり、下記の機関・方々のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。

山梨日本電気株式会社

杉本 正文（大月市教育委員会）

福田 政人（大月市教育委員会）

芹沢 畏（駒込堂遺跡博物館）

岸本 雅敏（富山県埋蔵文化財センター）

山本 正敏（富山県埋蔵文化財センター）

木下 哲雄（福井県金津町教育委員会）

# 目 次

第Ⅰ章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第Ⅱ章 遺跡概要	
第1節 遺跡の位置	2
第2節 地理的・歴史的環境	2
第3節 調査方法	2
第Ⅲ章 遺構と遺物	
第1節 住居跡と出土土器	3
第2節 土坑と出土土器	6
第3節 遺構外出出土土器	7
第4節 石器	7
第Ⅳ章 自然科学分析	46
第Ⅴ章 まとめ	50

# 第Ⅰ章 調査概要

## 第1節 調査に至る経過

中央自動車道の交通量の増加により現在の2車線を3車線に拡幅する計画は、大月ジャンクション以東で実施されているが、拡幅工事区域には上野原側から南大浜遺跡・長峰砦跡・強瀬北遺跡・安楽寺東遺跡と本遺跡が確認されている。本遺跡は用地買収の関係から一連の調査の最後に実施されたものである。

その経過は以下のとおりである。

平成10年10月1日 文化庁に発掘通知を提出する。

平成10年10月1日 発掘調査を開始する。

平成10年12月24日 発掘調査を終了する。

平成10年12月25日 遺物発見通知および完了報告を提出する。

平成11年3月25日 報告書を刊行する。

## 第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 長沢宏昌（主査・文化財主事）

崎田 哲（主任・文化財主事）

作業員 平井大三・鈴木美智恵・清水光子・加藤寿亀子・中村九二・佐藤美須子・鈴木八重子・渡辺和子・今泉 久・松村恭子・佐藤あさ子・志村恵子・高島はま子

整理作業員 佐々木富士子・平本玲子・堀内勝子・三枝明男・楠間美季江・伊藤順子・志村君子・雨宮一二三・石原沙織

## 第Ⅱ章 遺跡概要

### 第1節 遺跡の位置

本遺跡は大月市真木字原平789-3番地外に所在する。

### 第2節 地理的・歴史的環境

原平遺跡（以下、本遺跡と表記する）が立地する山梨県大月市大月町真木は、桂川の支流である笛子川の北側に位置し、黒岳山から南に下り、これと合流する真木川沿いに南北に長く開けた地域である。東北には大月町花咲、西南には初狩町下初狩を配し、北では駿岡町奥山に接する。『甲斐国志』巻之十九（村里部第十六下）には「此ノ所古ヘノ牧野ニテ村名之ニ起ルナランカ」とあることから、古くはこの地に牧野が存在したらしく、真木は「牧野」の遺名であると考えられている。

江戸時代には真木村が存在したが、上・下の2ヶ村に分けて扱われている場合が見受けられ、現在でも大字として地図上には、上真木・下真木の地名が確認できる。

本遺跡は下真木に位置し、大月市西端の笛子崎・清八山を水源とする笛子川に南面する、標高約415mの段丘上にある。現在、笛子川沿いには一般国道20号とJR中央本線が走り、本遺跡の南側には中央自動車道及び同富士吉田線とのジャンクションがみられる。

桂川や真木川、及び葛野川（大月市駿岡町）の流域には、これらに伴って形成された河岸段丘が発達しており、多くの遺跡が立地している。近年、本センターで調査された遺跡を考えてみても、桂川流域の中谷遺跡・揚久保遺跡・中溝遺跡・九鬼遺跡（以上、都留市）や大月遺跡・御所遺跡（以上、大月市）などを挙げることができるが、これらの流域に散在する遺跡の多くが縄文時代のものであることは特筆すべきであろう。本遺跡も以上の遺跡と同様、河川流域に形成された河岸段丘を利用して營まれた遺跡であり、昭和59（1984）年度に大月市教育委員会が実施した、工場誘致に伴う発掘調査によって、既に縄文時代早期末の竪穴住居約60軒をはじめ、縄文時代前期・中期・奈良・平安時代など100軒にも及ぶ住居跡が確認されている。遺構として縄文時代早期末の集落が、このようにまとまったかたちで確認されるのは、全国的にみても類例がなく、遺物としても国内最古のパン状炭化物が検出されるなど、原平遺跡は多くの話題を呼んだ。

今回の調査区域は、この原平遺跡の周縁部にあたり、平成8年度には大月市教育委員会が、山梨日本電気株式会社の駐車場設置に伴って、本遺跡の北側隣接区域を調査している。

本センターでは、東西約2,000m<sup>2</sup>の帶状の区域から、縄文時代早期末の竪穴住居跡6軒を含む住居跡8軒、縄文中期初頭の土坑1基を含む土坑150基、時期不明のピット224基を検出した。昭和59年度に大月市教育委員会によって確認された住居の検出状況から推測するに、原平遺跡は、南流して笛子川に合流する男川と、その東側を南流する沢との間に形成された段丘の縁辺部の遺跡で、縄文時代早期末だけでもおよそ100軒に至る集落が存在していた可能性が考えられるものである。

### 第3節 調査方法

今回の調査は、国土座標系原点にもとづいた基準杭2本を設置（東杭 X=-44345.000m・Y=37960.000m、西杭 X=-44345.000m・Y=37936.000m 方向：東西杭の距離24m）し、それらを中心に4mグリッドを設定して全面調査を行った。グリッドは調査区北側から南に向かってA・B・C・…・Nまで、東側から西に向かって1・2・3・…・31までを設定した。

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

前章で述べたように、これまでの大月市教育委員会による2回の調査によって、本遺跡では縄文時代早期末の集落と同中期の集落、さらには平安時代の集落が確認され、とくに第一次調査で確認された早期末の大規模な集落は他に例を見ない極めて貴重な資料となっていた。当然、第二次調査でも早期末の集落の存在が予想されたが、予想に反して該期の住居跡が1軒と、平安時代の住居跡が2軒確認されただけであったため、該期集落の本体からは完全に外れた位置であると考えざるを得ない状況になっていた。今回の調査は二次調査の隣接地でありしかも面積も半分程度であることから、今回の調査で住居跡が確認されてもせいぜい1～2軒程度で、少なくとも早期末の良好な集落の存在は予想しようもなかったのである。

調査の結果、早期末の住居跡6軒と平安時代の住居跡2軒、さらには150基の土坑（早期末数基を含む）が確認され、調査前の予想をはるかに上回る成果が得られた。

以下に遺構と遺物を記すことにするが、遺物は本文中の図面番号を省略するため通し番号で記載した。したがって、本文中の遺物番号が第19図～33図までの遺物番号を示すことになる。また、遺構の時期を明らかにする必要から、遺構説明においては土器についてのみ概要を記し、石器はまとめて後述する。

### 第1節 住居跡と出土土器

#### ・ 1号住居跡

F-11グリッド。北側半分だけの調査である。本住居跡の南側は大月市道の建設によって削り取られており、長軸の長さは不明である。東西方向がおそらく短軸になると思われるが、長さ4.1mを計る。壁の立ち上がりはきわめて緩い。また床も炉付近でさえも軟弱である。壁近くに径40cm、深さ20cm程度のピット3基が確認され、炉を切るかたちで径80cm、深さ50cmの土坑が存在するが、これは炉を切っていることからも住居跡より新しく掘り込まれたものである。覆土は暗褐色粘質土でスコリアが含まれる。

径約50cmの円形に焼土の集中が確認されており、その部分を炉と判断するが、掘り込みはごく浅く、焼土は盛り上がった状態であった。焼土と周辺の土は、すべて採取し水洗したが、黒曜石チップが非常に多く混ざっていた。黒曜石自体には火熱を受けた痕跡は見られないが、確実に焼土内から出土しており、炉内へのチップ投棄が行われたものと推定される。

遺物は非常に少い。土器は厚手の含繊維と無繊維、および薄手無繊維の3種類が確認されているが、ほとんどが小破片である。その中で、1は本住居跡で唯一器形が復元可能な資料である。薄手無繊維で内面には指頭圧痕が明瞭である。外面には幅広の低い隆帯を波状に巡らし、隆帶上を含めて貝殻による条痕を施した木島Ⅲ式土器である。小破片は41～58に示す。41は厚手無繊維で、沈線による渦巻きと貝殻条痕が施された下吉井式土器である。厚手のものでは42・43・48・50・51が繊維を含み、44～47、49が無繊維である。無文のものが多いが、46には幅広の条痕が内外面に、49・51には細い条線が施される。53～58には木島式をまとめたが、いずれも幅広の条痕が施され、木島Ⅲ式期に位置づけられるものである。52も東海系に括られるものであろうが、器壁の厚さや円形の粘土紐の貼付、さらには条痕ではなく貝殻の押圧など、53～58とは一線を画すものである。

石器は石鎌（213）、加工痕ある剥片（232）、楔形石器（233・234）、礫器（255～258）、8号住居跡出土物と接合した石皿（251）、たたき石（252）などが出土している。

#### ・ 2号住居跡

B・C-11・12グリッド。北側の一部が調査区域外のため未調査である。また、東側を52号土坑によって切られている。ほぼ南北が主軸方向と思われ、長軸3.3m、短軸3.0mを計る。壁の立ち上がりは極めて緩い。住居内

に柱穴その他の施設は確認されなかった。覆土は1号住居跡と同じである。

炉は地床炉であるが、30cm×50cmの範囲に焼土がわずかに散る程度で、特にはっきりした掘り込みも確認されなかった。

遺物はわずかである。土器は、2が唯一器形が推定できる資料で、口径約15cmの小型深鉢である。口縁部下に幅1cm、高さ0.7cmのタガ状隆帯を巡らしたもので胴部以下は内外面ともに無文である。胎土に多量の繊維を含む。59~61も、厚手で2と同様多量の繊維を含む。61には幅広の条痕が施される。62~64は東海系の一群で内面に指頭圧痕が明瞭である。なお部位のためか条痕や条線は見られない。

石器は礫器（260・261）が出土している。

#### ・ 5号住居跡

F・G-20グリッド。今回の調査で最も良好な残存状況を示した住居跡である。円形を呈し、直径約4.2mを計る。本住居跡は、完掘したために柱穴の並びがはっきり確認されている。壁際に大小14基のピットが巡るが、このうち深さ40cm以上を計るのは図中の1~5であり、これらが主柱穴と考えられる。柱間は最も短い1と2の間が95cm、それ以外は155cm~210cmとばらばらである。北側壁上部にも3基のピットが確認されているが、40cm近い深さの6以外は掘り込みも浅く、機能については言及できない。なお間隔は130cmと155cmである。本住居跡も壁の立ち上がりは緩く、床も軟弱である。

炉は90cm×75cmの範囲に焼土が確認されており、不整形の地床炉である。深さ15cmにまで焼土がみられた。

遺物は少ない。土器は他の住居跡と同様、厚手の含繊維と無繊維、薄手の無繊維の3種類が混在する。65は唯一の口縁部破片で、波状を呈する。低い隆帯を張り付け、口唇及び隆帶上に貝殻の押し引きを施したものである。波頂部内面にも貝殻による押し引きがある。他の資料に比べ一段階古く位置付けられよう。また、口縁部下にも低い隆帯を張り付け、そこでは竹管状工具によって結節状の押し引きを行っている。74~76は非常に丁寧に磨かれており外面には光沢がある。また79と80は隆帯と沈線の違いがあるが、いずれも竹管状工具による結節状の押し引きが施されている。

石器はドリル（235）、楔形石器（236・237）、石核（238・239）、礫器（262）、加工痕ある剥片（263~265）、磨石（251）などが出土している。

#### ・ 6号住居跡

E・F-18グリッド。調査区の制限からおよそ半分の調査である。また、76号土坑により西半分は壊されていた。やはり壁の立ち上がりは緩い。不整形のピット3基が確認されているが、76号土坑に接した1基だけが約50cmと深く、柱穴の可能性がある。なお調査区域外では炉は確認されなかった。

遺物は少ないが、本住居跡からは今回の調査で唯一水晶の小破片がまとまって出土しており、そのなかに石鎌や楔形石器も含まれている。土器は非常に少ないが、厚手の含繊維と無繊維のものが出土している。87は繊維を多く含み、タガ状隆帯を有する下吉井式土器である。本住居跡では薄手の無繊維は含まれない。

石器は石鎌（240）、楔形石器（241・242）、礫器（267・268）、加工痕ある剥片（269）、磨石（254）などが出土している。

#### ・ 7号住居跡

F・G-19・20グリッド。5号住居跡に接して確認されたもので、小型である。梢円形を呈し、長径3.4m、短径2.9mを計る。壁の立ち上がりは緩く、床も軟弱である。柱穴は確認されなかった。

住居の中央部に広く焼土が散っているが、壁際には認められず、火災とは考えられない。この焼土のうち、炉は中央部の約60cmの円形の範囲と考えられ、深さ5cmに焼土の堆積がみられた。

遺物は少ない。土器は、やはり厚手の含繊維と無繊維および薄手の無繊維のものが出土している。97は縄文が施文されているが、胎土に雲母が多く中期前半であろう。

石器は石鎌（244）、削器（245）、礫器（274・275・277・278）、加工痕ある剥片（276・279～281）などが出土し、接合剥片（270=271・272・273）も確認されている。

#### ・ 8号住居跡

F・G-14グリッド。本住居跡の上部には土坑が集中しており、そのうちの1基の土坑の坑底には焼土が確認されていたものの住居跡の存在は予想していなかった。土坑群の調査終了後、上部褐色土を剥ぎ取り最終の遺構確認を行った段階でプランが確認され、坑底の焼土と思われたものが住居跡の炉であることが確認されたものである。そのため壁はごくわずかな立ち上がりが確認されただけである。床面には10基の小ピットが確認されたが浅いものがほとんどで、20cm以上の深さを有するのは番号を付した1～3の3基だけである。

炉は浅い掘り込みの地床炉で、径約50cmの円形を呈す。

遺物は少ない。土器は4片を図示するが、いずれも厚手で繊維を含むものと含まないものとがある。101は口縁部にちかい部位であり、粘土紐を貼り付けて隆帯とし、竹管状工具を用いて結節状に押し引きを繰り返しており、さらに隆帯上には貝殻による条痕を施文している。他の住居跡から出土した土器と同様の施文や使用工具である。

石器は石鎌（247）、ドリル（248）、礫器（282～284）、加工痕ある剥片（285～288）などが出土している。

#### ・ 3号住居跡

E・F-14・15グリッド。住居のほぼ中央部を54号土坑で切られている。東西約3.8m、南北約3.5mの長方形で北辺のほぼ中央にカマドが存在する。壁の立ち上がりは急である。カマド周辺部の床面は堅く踏み締められているが、他は軟弱である。柱穴は床面をはがして精査したが確認されなかった。

カマドは一部が土坑に切られ、また耕作による擾乱を受けていたため残存状況がよくない。幅120cm、長さ140cmの大きさで粘土と石を用いて構築したものである。袖石は20cm大と、カマドとしては比較的小型である。

遺物は土器だけであり、カマド内およびその周辺に集中するが、カマド脇では右側に特に集中している。甕と壺を図示するが、小破片ながら皿も出土している。甕（5～8）は口縁部が薄い造りで、くの字状に強く外反する。壺は2個体を図示した。いずれもみこみ部と体部の境に磨きはなく、口径と底径の比率がほぼ2：1であることなどから、甲斐型土器編年のⅣ期に位置付けられよう。

#### ・ 4号住居跡

G・H-18・19グリッド。東西約4.2m、南北約4.7mの長方形で北辺のほぼ中央にカマドが存在する。住居の形態、カマド位置など3号住居跡と全く同じであるが、本住居跡が一回り大きい。掘り込みが深く、壁の傾斜もきつく、残存状況も良好である。床はカマド付近から中央部にかけて非常に堅く踏み締められている。本住居跡も床面を剥いで精査したが、柱穴は全く確認できなかった。

カマドは幅170cm、長さ130cmの規模で、やはり石と粘土で構築されている。40cmの間隔で、両側に30～40cm大的平石を2ないし3枚立て袖石としている。また、天井には柱状の石を跨がせて天井石としており、非常にしっかりした造りである。燃焼部は幅40cm、奥行き50cm、高さ30cm程度の空間であったと考えられる。

遺物は、やはりカマド内とその周辺にまとまっているが、本住居跡もカマド右側に集中する。本住居跡でも土器だけであり、甕・壺・皿の3器種が確認されている。甕（9～20）は3号住居跡と類似するが、9は他に比べ口縁部が肥厚し外反の状況も強くない。また15は口縁部に指頭による調整と体部の横方向にヘラ削りがあり、胎土には長石が目立つ。これは相模系の甕であり、地域的な特徴と言えよう。壺はやはり口径と底径の比率がほぼ2：1であり、内面の磨きや底部の調整など3号住居跡と同様甲斐型編年のⅣ期に位置付けられよう。なお、31

は体部とみこみ部の境に明瞭に磨きがあり、削り出し高台を有するもので、一段階古く位置付けられよう。皿は破片しか出土していないが、暗文のないものが多い。36は唯一の放射状暗文が施された資料である。なお、坏のうち、30~32には底面に墨書きが認められるが判読できない。

## 第2節 土坑・溝と出土土器

各土坑からは、量や時期に差があるものの遺物が出土している。このうち帰属時期を限定しやすいものとして、土器の完形や大破片が坑底やその付近から出土しているもの、あるいは限定された時期の破片だけが出土しているものなどについて詳細を記す。それ以外については一覧表に示すこととする。

### ・17号土坑

D-9グリッド。長径100cm、短径90cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ15cmを計る。この浅い掘り込み内から土器の小破片が夥しく出土した。接合した破片もあるもののそれはわずかで、別個体の破片が坑内に入れられたものである。109~135までを図示したが、前期末から中期初頭までと若干の時期差がある。133~135が前期末であり、とくに同一個体と思われる134と135は関西系である。それ以外は中期初頭に位置付けられる。

### ・18号土坑

E-11グリッド。長径125cm、短径105cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ40cmを計る。壁の立ち上がりは垂直にちかく、底面は平坦である。底面に接するか、あるいは10cmほど浮いた状態で拳大~30cm大の礫が入れられており、その上部から土器が集中して出土している。3は浅鉢の破片で、口径35cm程度と推定される。4はほぼ完形の深鉢で口縁部の半分以上を欠損している。その他136~140に小破片の一部を示したがいずれも中期初頭に位置付けられる。なお、内部に焼土は確認されていないが、リン酸分析の結果、土坑外部に比べて内部のリン酸の富化が認められ、ヒトの埋葬の可能性が指摘されている（第IV章参照）。

### ・37号土坑

D-12グリッド。長径100cm、短径90cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ40cmを計る。壁は緩やかに立ち上がる。壁の一部にテラス状の段を有する。遺物は土器だけで、このテラス部分からやや浮いて出土した。148~150の3片でいずれも早期末である。これらはいずれも土器の種類が違い、148は含繊維、149は無繊維、150は東海系薄手無繊維である。

### ・135号土坑

H-20・21グリッド。長径130cm、短径75cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ20cmを計る。壁の立ち上がりは緩く、底面は平坦である。内部からが拳大の礫が浮いて出土している。土器はわずかに小破片1片が出土しているのみである。203は縄文時代後期に位置付けられよう。

### ・145号土坑

H-18グリッド。長径150cm、短径80cmの楕円形を呈し、確認面からの深さ20cmを計る。壁の立ち上がりは緩い。内部には30cm大~拳大の礫がまとまっており、これらは底面から10cm程浮いている。出土遺物はない。

### ・1号溝

H-23、I-23、J-23・24グリッドにかけて溝が確認された。幅約1m、長さ約7mを計るが、深さは20cmと浅い。出土遺物が全くないため時期・性格とともに不明であるが、覆土に縛まりがないことから近現代の所産と

位置付けたい。

### 第3節 遺構外出土土器

遺構外からも遺物は多く出土しているが、早期末の土器について概要を記す。

209~227に早期末の破片を示したが、厚手・含繊維・無文（209・212・214・217・219・220・221）、厚手・無繊維・無文（210・211・213・215・216・222）、厚手・含繊維・条痕文（218）、厚手・無繊維・条痕文（223・224・225）、東海系の薄手・無繊維・条痕文（226・227）の5種類が出土している。このうち東海系を除いた4種類は繊維の有無による分類は可能だが、条痕文の有無は部位による場合があるため同一個体を分類している可能性もある。なお、220は口縁部にちかく、タガ状隆帯の剥離痕が確認できる。また、209には海綿体骨針が含まれている。

### 第4節 石器

ここでは、早期末の住居跡出土の石器を中心に報告する。

#### ・1号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）5点、二次加工ある剥片（ホルンフェルス製）2点、二次加工ある剥片（黒曜石製）1点、石鎌（黒曜石製）1点、楔形石器（チャート製）2点、凝灰岩の使用痕ある剥片1点、磨り面を有する板状礫1点、敲き石1点の合計14点の石器と、黒曜石剥片32点、ホルンフェルスの剥片24点、粘板岩の剥片4点、緑色凝灰岩の剥片2点、泥岩の剥片1点、凝灰岩の剥片1点の合計64点の剥片がある。

231は、凹基無茎鎌の基部破片である。黒曜石製。232は、黒曜石剥片の打面付近を両面加工した二次加工ある剥片である。233はチャート剥片を用いた楔形石器である。図正面右半部分の大きな剥離が主剥離面である。裏面に自然面を残す。234もチャート剥片の楔形石器である。裏面に広く主剥離面が残り、上・下面是折り面である。4辺に對局剥離がある。

255~258はホルンフェルス製の礫器である。255は、板状の原石ないしは大型剥片を折り取るようにして長方体状、箱状の形態の素材を用意し、その1辺に両面、連続する1辺に片面の調整を施している。正面に広く自然面、裏面には節理面を残す。256は分厚い大型剥片素材で、片面のみ調整のチョッパーである。刃部の対局側と裏面は広く自然面である。257は板状大型剥片を斜めに分割した素材によるチョッパーである。刃部の対局および裏面が自然面で覆われる。258は全面を剥離面で覆われた中型の剥片を素材としたもので、円形の刃部のチョッピングトゥールである。図示しなかったが、このほかに中型剥片素材のチョッピングトゥールが1点ある。

257はホルンフェルスの礫器調整剥片を利用した二次加工ある剥片である。また、礫器素材剥離過程で出来たと思われる、3辺が折り取られた中型剥片を利用した二次加工ある剥片1点があるが、これは図示しなかった。

251はひん岩製の磨り面を有する板状礫で、表裏両面に弱い鏡面状の磨り面がある。図右側が1号住居跡出土で部分的に加熱されており、また弱く焼けている。左側の8号住居跡のものと接合するが、8号住居跡のものは焼けていない。一つの板状礫を分割し、複数の住居で使用したものと思われる。252は砂岩円礫の一端を敲打したものである。

剥片は細部調整した礫器刃部を背面に残す剥片3点、主剥離方向と同一方向の大きな剥離が背面に見られる剥片7点、礫面のみの剥片2点などがみられ、礫器の調整時に出現した剥片が主体と思われる。また、凝灰岩製の剥片2点は、石器石材として良質なもので、これのみで何らかの用途に用いられた可能性がある。黒曜石剥片はいずれも1cm角以下の大きさのもので、石鎌素材剥離や石鎌の調整が行われたと思われる。

#### ・2号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）2点、ホルンフェルス剥片17点、粘板岩剥片3点、片理の激しいホルンフェルス剥片2点があり、黒曜石製、チャート製の剥片や石器を持たない。

260はホルンフェルス大型剥片の主剥離面側に大きな剥離を行い、ほぼ全周を両面加工したチョッピングツールである。正面下端に図示した折れ面に調整剥片が接合し、下方に4cmほど器体が長かったことが知られる。261は2片に折り取り面が見られる分厚い板状の素材を利用したもので、円刃のチョッピングツールである。

#### ・5号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）1点、二次加工ある剥片（ホルンフェルス製）4点、黒曜石製石錐1点、凝灰岩製楔形石器2点、黒曜石石核1点、凝灰岩石核1点、磨り石1点の合計11点と、黒曜石小剥片10点、ホルンフェルス剥片34点、ホルンフェルス分割礫4点の合計48点が出土した。

235は黒曜石小剥片を利用した石錐で、先端部に錯交状の剥離が見られる。236、237は凝灰岩剥片を利用した楔形石器である。238は凝灰岩の角柱状の分割剥片を利用した石核である。239は黒曜石の剥片を素材とした小型の石核である。

262は板状の分割剥片を利用したホルンフェルス製のチョッパーである。263～265はホルンフェルス剥片を利用した二次加工ある剥片である。263、264は礫器素材製作時の大型剥片、265が礫器の調整剥片と思われる。

251は安山岩円礫を利用した磨り石である。

黒曜石剥片は1cm角以下の小剥片である。また、ホルンフェルス剥片は9点の礫器刃部を残す礫器調整剥片を含む。ホルンフェルスの分厚い分割剥片は礫器の素材として持ち込まれたもの可能性がある。

#### ・6号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）2点、二次加工ある剥片（ホルンフェルス製）1点、水晶製石錐1点、水晶製楔形石器2点、泥岩製削器1点、玄武岩製磨り石1点の合計8点の石器と、黒曜石小剥片10点、ホルンフェルス小剥片8点の合計18点が出土した。

240は水晶製の凹基無茎錐である。241、242は水晶製の楔形石器である。243は泥岩の剥片の主剥離面側の1辺に調整を加えて、やや円刃の刃部を作出した削器である。

267は中型剥片の周囲に調整を加えたチョッピングツールである。裏面が主剥離面で、最も小型である。268は板状の中型分割剥片の対局する2辺に調整を加えたもので、一方が片面、一方が両面である。269はホルンフェルス剥片を利用した二次加工ある剥片である。

254は多孔質の玄武岩製の磨り石で、両面がかなり平坦な面をなすほどに磨られている。また、横口の両面が面をなすほどに敲打されている。

黒曜石剥片はいずれも小剥片で、ホルンフェルス剥片は4点の礫器刃部を残す礫器調整剥片を含む。

#### ・7号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）4点、削器（ホルンフェルス製）1点、二次加工ある剥片（ホルンフェルス製）6点、黒曜石製石錐1点の合計13点の石器と、黒曜石小剥片19点、ホルンフェルス剥片38点、片理の発達したホルンフェルス剥片3点、粘板岩剥片1点、凝灰岩剥片1点、玉ずいの角柱状礫片1点、砂岩剥片3点の合計66点が出土した。なお、砂岩剥片3点は接合する。

244は黒曜石剥片の周辺に調整を加えた三角錐である。245はホルンフェルス剥片を利用した鋸齒状調整の削器である。246はホルンフェルス剥片の二次加工ある剥片であるが上端の縁部と正面左上方の縁部の調整で先端部を作り出した石錐にも見える。なお、246は274の礫器の正面中央の大きな剥離面に接合する。

270は砂岩剥片の接合資料である。大型剥片の主剥離面を打面とし、同一方向に剥離された縦長剥片である。

礫器の調整剥片ではなく、この剥片そのものが目的剥片と思われる。271, 272, 273の順で剥離が進んでいる。

274は板状の大型剥片を分割した長方体状の剥片を利用した礫器である。246と接合する。275は板状剥片を利用したショッピングトゥールである。277は背面に自然面をもつ大型剥片を利用したショッピングトゥールである。278も277と同様である。

276は中型のホルンフェルス剥片を利用した二次加工ある剥片である。279も同様である。280は礫器調整剥片を利用した二次加工ある剥片で、調整部が石錐状である。281は礫器素材剥離時の大型剥片を利用した二次加工ある剥片である。このほか図示しなかったが、二次加工ある剥片には緑色凝灰岩製1点、ホルンフェルス剥片1点がある。

黒曜石剥片はいずれも小剥片。ホルンフェルス剥片は大、中、小とあり、礫器刃部をもつもの6点、主剥離と同一方向の剥離のみのもの12点、隕面のみのもの6点を含み、礫器の調整がかなりの頻度でなされたことが推定される。

#### ・ 8号住居跡

礫器（ホルンフェルス製）3点、石錐（ホルンフェルス製）1点、二次加工ある剥片（ホルンフェルス製）5点、黒曜石製石錐1点の合計10点の石器と、黒曜石小剥片2点、チャート剥片4点、緑色凝灰岩剥片1点、ホルンフェルス剥片8点、片理の発達したホルンフェルス剥片1点、ホルンフェルス分割礫3点の合計19点が出土した。また、他の住居跡には見られない玄武岩の溶岩礫が4点見られた。

247は黒曜石製の凹基無茎錐である。248はホルンフェルス剥片を利用した石錐である。

282は中型剥片を利用した礫器の破損品である。283は板状剥片を利用した礫器の欠損品（調整剥片）である。284は中型剥片を利用したショッパーである。

285は凝灰岩剥片を利用した二次加工ある剥片である。286はホルンフェルスの縦長剥片を利用した二次加工ある剥片である。287は砂岩剥片の使用痕ある剥片。288はホルンフェルス剥片の二次加工ある剥片である。

ホルンフェルス剥片には礫器刃部をもつ剥片3点などが含まれる。

#### ・ 土坑等出土の石器

249は29号土坑出土の有舌尖頭器で珪質頁岩製である。縄文時代草創期中頃のもので、この土坑の時期を示すものではない。250は70号土坑のホルンフェルス中型剥片を利用した礫器。289は20号土坑の礫器、290は136号土坑の礫器、291は34号土坑の礫器、292はD12グリッド出土の礫器、294～296はI23グリッド出土の礫器、293はF14出土の礫器で、いずれもホルンフェルス製。

#### まとめ

今回報告した原平遺跡の石器群は、縄文時代早期末の石器群として良好な資料である。その組成内容は、ショッパー、ショッピングトゥールの両者を含むホルンフェルスの礫器を主体とし、凹基無茎錐を中心とする石錐、楔形石器、石錐、削器、敲き石、磨り石が見られ、二次加工ある剥片が一定量見られる。

礫器の製作工程がある程度復元可能である。255に見るよう大型板状の剥片を折り取るようにして分割し、長方体状、箱状の形態の素材を作り、その1、2辺に刃部を作出するものがある。また図示はしなかったもののこうした素材そのものと思われる分割礫が5号と8号住居跡に見られる。板状の剥片には片面を広く自然面が覆うもの（256, 257, 260など）、全面剥離面で覆われるもの（258, 261など）などもある。また、分割面が見られないものもあり、大型剥片の剥離も素材の製作工程のなかにあった可能性がある。

接合作業を行ったが、素材製作時の剥片の接合例はなく、本遺跡ではこの段階の工程は行われていなかった可能性が大きい。接合例や残された剥片の特徴から復元できるのは、礫器の刃部作出段階ないしは使用段階での刃部調整、すなわち刃部再生段階の存在である。

ところで、礫器刃部調整や刃部再生段階で出る剥片は使用痕ある剥片や二次加工ある剥片として利用されている。また、礫器素材作成段階の比較的薄い剥片が持ち込まれ、二次加工ある剥片などに利用されている。

他の石器では黒曜石の1cm角以下の小剥片が見られ、石墨素材剥離と調整剥離が行われたらしいが、石核は239の1点しか遺存しない。凝灰岩剥片が少量見られ、石核も1点(238)見られるが、剥片剥離が盛んに行われた様子ではない。チャート剥片はさらに少量で、まったく持ち込まれたものである。

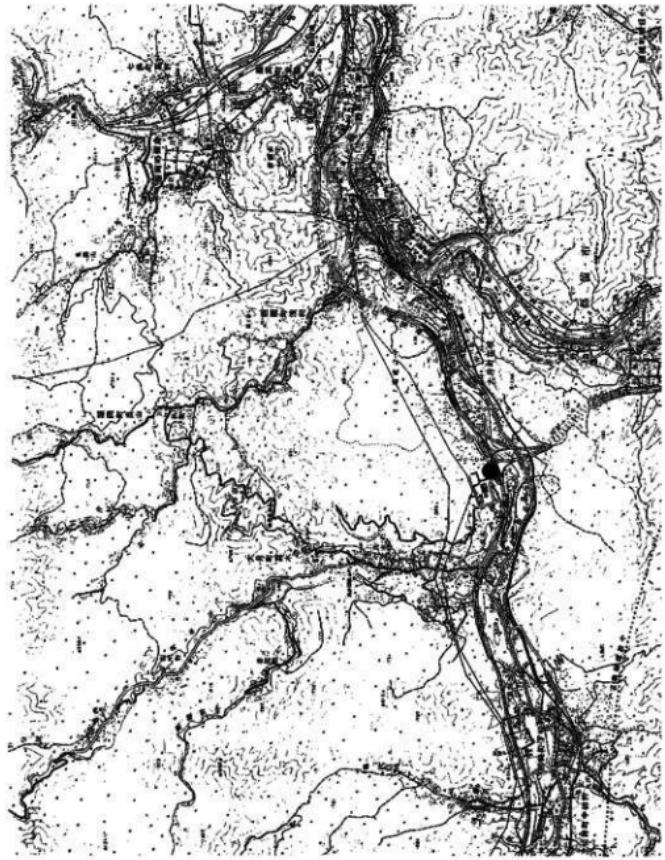
使用石材は、礫器がホルンフェルス、石錐が黒曜石、水晶、楔形石器がチャート、水晶、凝灰岩、石錐は黒曜石とホルンフェルス、削器は凝灰岩である。石器種による使い分けが明瞭である。

もう1点注目されるのは、磨り面を有する板状礫(251)である。1号住居跡と8号住居跡のものが接合し、1号住居跡のものが分割後焼かれている。おそらく、現存するものの2倍程度の大きさの板状礫を4分割程度にし、それぞれ住居跡ごとに分配したものと思われる。たまたまその内の2つが把握されたが、この両者は同時併存し、共同生活を送っていたものと推定される。

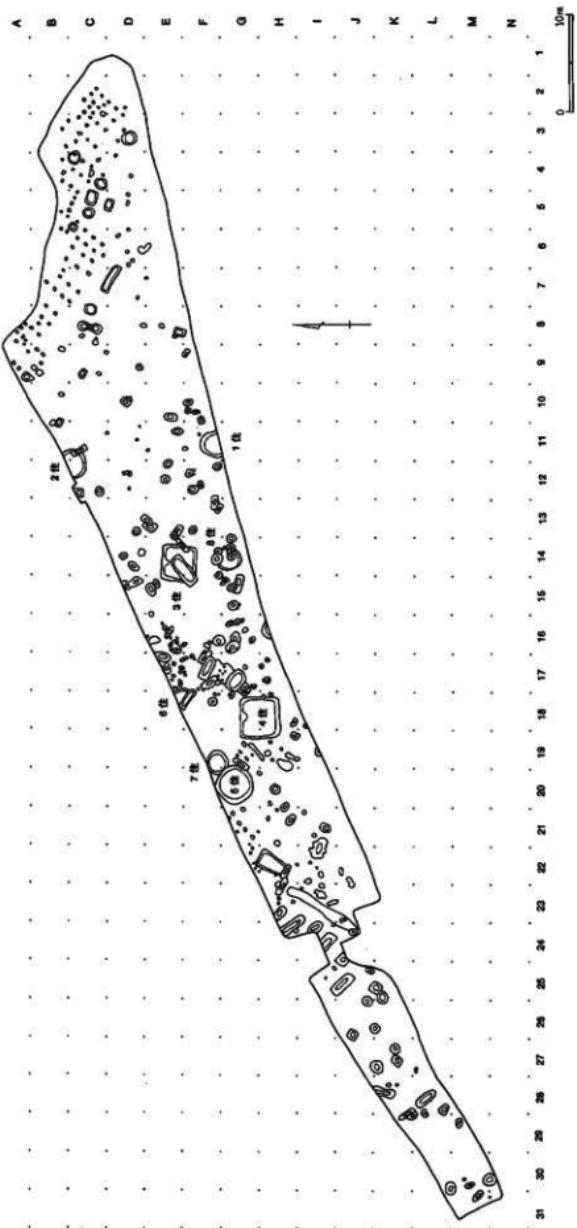
土坑一覧表

番号	形状	規格 (cm)			遺物番号	遺物時期	備考
		長径	短径	深さ			
1	円形	130	130	30			
2	長方形	160	135	45			
3	円形	150	145	10			
4	円形	145	145	10			
5	椭円形	110	80	15			
6	長方形	150	120	40	105	中期初頭	
7	長椭円形	270	60	30			
8	円形	150	140	15			
9	長椭円形	130	65	20	106	中期初頭	
10	不明		85	10			
11	椭円形	150	115	10			
12	椭円形	110	100	10	107	後期?	
13	椭円形	80	60	15			
14	長方形	110	75	25			
15	長方形	180	110	25	108	中期?	
16	不整円形	110	110	20			
17							別記
18							別記
19	椭円形	110	85	10			
20	不整円形	120	100	20	141	中期初頭	
21	椭円形	170	120	15			
22	椭円形	75	60	15			
23	長方形	270	100	45	142・143	中期初頭	
24	椭円形	180	120	25	144	前期末	
25	長方形	130	80	25			
26	椭円形	100	80	10			
27	円形	130	130	15	145	中期初頭	平安あり
28	椭円形	110	95	15			
29	不整円形	150	150	25	146	後期	平安あり
30	円形	130	130	25			平安あり
31	椭円形	90		15	147	中期末	
32	椭円形	80	70	20			
33	椭円形	130	75	15			
34	椭円形	140	105	45			
35	椭円形	125	105	10			
36	椭円形	100	80	20			
37							別記
38	椭円形	240	130	30	151・154	中期	
39	不整円形	270		35	155・157	早期末	無織縫
40	円形	145	140	60	158	早期末	含織縫 平安あり
41	長椭円形	220	115	25	159・160	早期末・中期	無織縫 平安あり
42	長椭円形	220	60	40	161	後期	
43	長方形	170	150	30	162	須恵器	平安あり
44	椭円形	180	150	50	163	後期	
45	椭円形		105	30	164	中期初頭	平安あり
46	長椭円形	150	120	30	165・166	中期	平安あり
47	椭円形	120	110	40	167	後期?	平安あり
48	長椭円形	150	85	45	168	中期	
49	不明		120	30			平安あり
50	円形	155	150	20			平安あり
51					169・171	早期末	平安
52	長方形	170	90	45	172・173	中世?	平安あり
53	椭円形	85	75	40			
54	長方形	340	160	55	174	早期末?	平安あり
55	長椭円形	300	70	30			平安あり
56	椭円形	70	60	40			
57	長方形	140	125	30			
58	椭円形	120	70	30			
59	椭円形	130	120	30	175	後期?	一部唐状
60	椭円形	60	45	25			
61	椭円形	60	45	35			
62	椭円形	70	60	35			
63	椭円形	75	65	20			
64	長椭円形		55	30			
65	長椭円形	230	80	30	176・177	早期末・近世	平安あり
66	不整円形	210	140	25	178	中期	平安あり
67	不整円形	180	120	25	179・180	早期末・中期	
68	長方形	240	130	10	181	中期	平安あり
69	不明		120	20			
70	椭円形	190	170	35	182	中期	平安あり
71	長方形	150	100	25	183・184	中期・後期	平安あり
72	不整円形	110	110	15			
73	椭円形	100	90	25			
74	椭円形		130	35			
75	長椭円形		60	30			

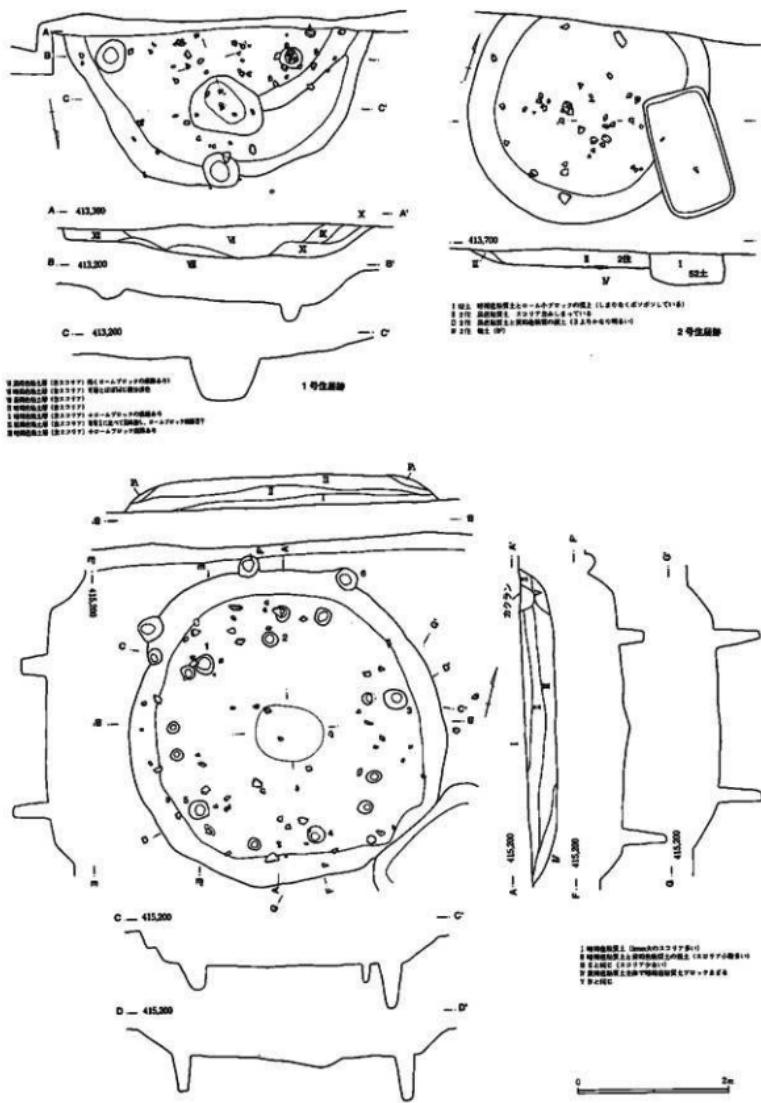
番号	形状	規格 (cm)			遺物番号	遺物時期	備考
		長径	短径	深さ			
76	長楕円形	250	80	30			
77	椭円形	120	105	10			
78	不明			80	35		
79	椭円形	60	50	30			
80	椭円形	85	65	35			
81	円形	55	55	20			
82	長楕円形			75	30		
83	椭円形	90	60	15			
84	不整形	80	40	20			
85	椭円形	65	45	20			
86	椭円形	65		15			
87	不整形	125	65	25			
88	椭円形	50	40	20			
89	椭円方形	105	95	40	185-187	近世	
90							
91							
92	椭円形	150	140	35			
93	椭円方形	190	115	45			
94	長方形	310	140	35			
95	椭円形	140	120	25	188	中期	
96	長方形	270	120	90			
97	長方形			180	189-191	近世・中南	
98	椭円形	115	70	25			
99	椭円形	110	100	40			
100	椭円形	80	60	25			
101	長楕円形	290	105	25	192-193	後期	
102	不明		90	15			
103				-			
104	椭円形	130	120	15	194	須恵器	
105	椭円形	140	125	30	195	中期	
106							
107	不整形	130	120	45			
108	円形	80	80	10			
109							
110	椭円形	190	135	25	196	中期	
111	長楕円形		80	10			
112	長楕円形	240	90	20			
113	長楕円形		50	25			
114	不整形	130	120	25			
115	不整形	115	105	35			
116	椭円方形	110	100	10			
117							
118	長楕円形	200	130	55			
119	不整形	180	60	20			
120	椭円形	150	100	25			
121	円形	145	140	60	197	後期	
122							
123	不整形	180	155	35	198	早期末	海綿体骨針含む
124	不整円形	100	90	15	199	早期末	
125	不整形						
126	長方形	340	170	65	200	後期	
127	不明	125					
128	長楕円形	300	65	25	201	中期	
129	長楕円形		80	25			
130	長楕円形		100	20			平安あり
131	長楕円形	180	100	20			
132	不明		90	10			
133	不整形	110	70	25	202	中期	
134	椭円方形	175	115	35			
135							
136	不整形	170	90	10			
137	長方形		110	25			
138	長楕円形	260	80	25			平安あり
139	椭円形	125	115	30			
140	長楕円形	130	80	40	204	早期末	
141	長楕円形	130	80	35	205	中期	
142	不明			15			
143	不整円形	80	80	25			
144	椭円形	115	85	30			
145							
146	不明			20			
147	円形	130	130	80	206		平安あり
148	椭円形	125	105	40	206-207	後期	
149	長楕円形	230	70	15			
150	精円形	130	70	25			



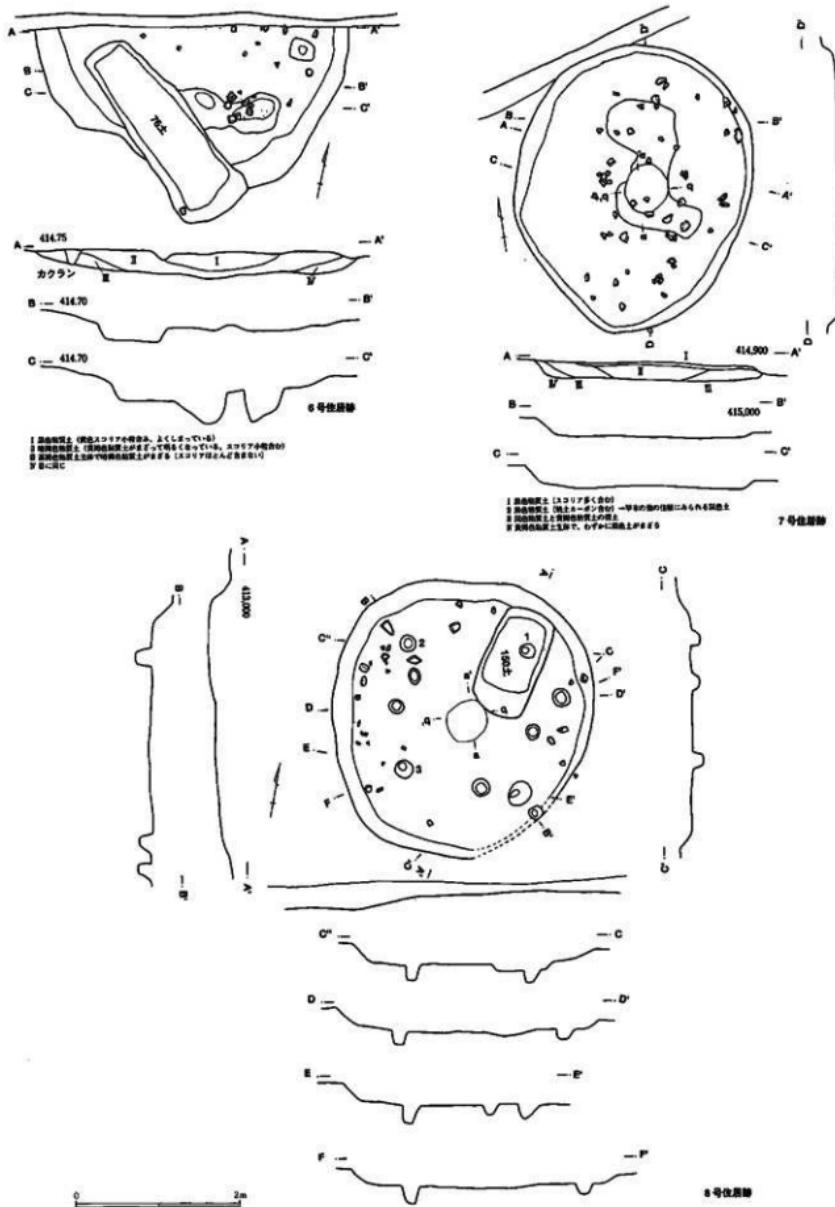
第1回 遊遊の図



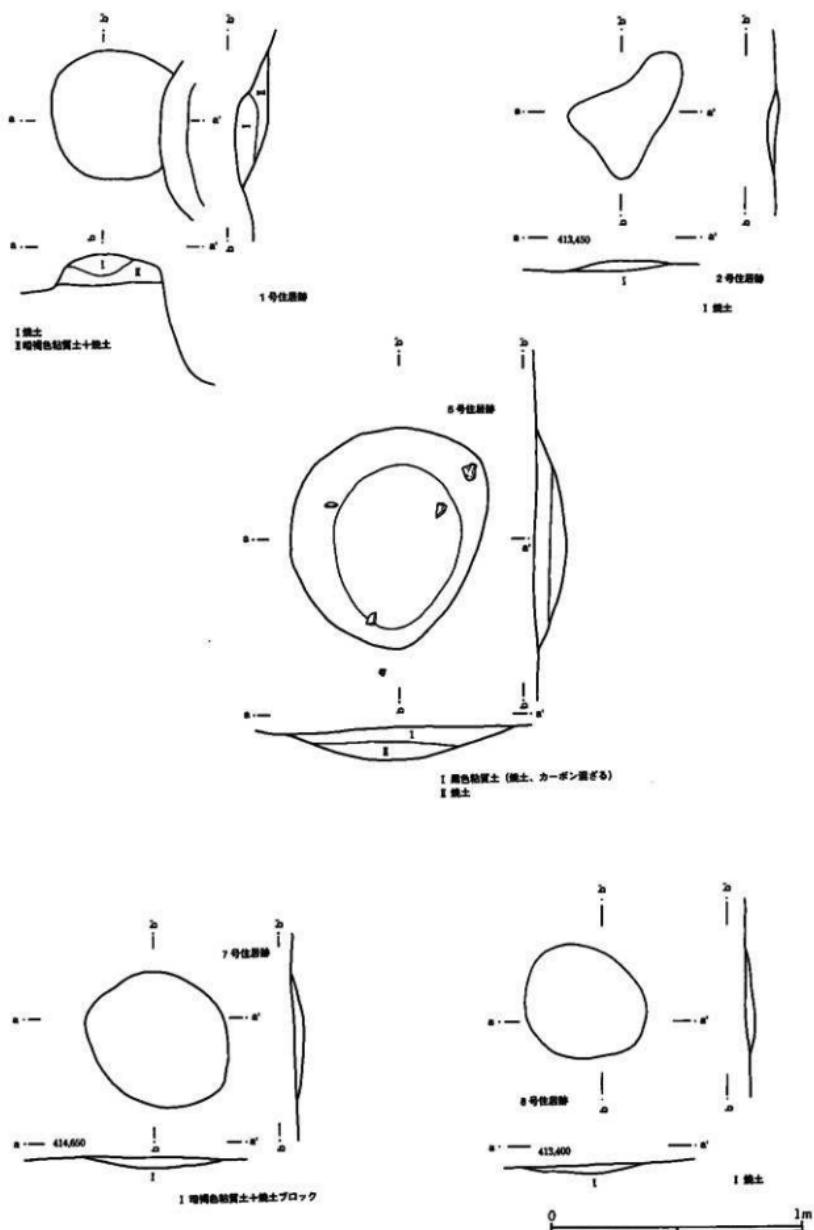
第2図 原平遺跡全体図



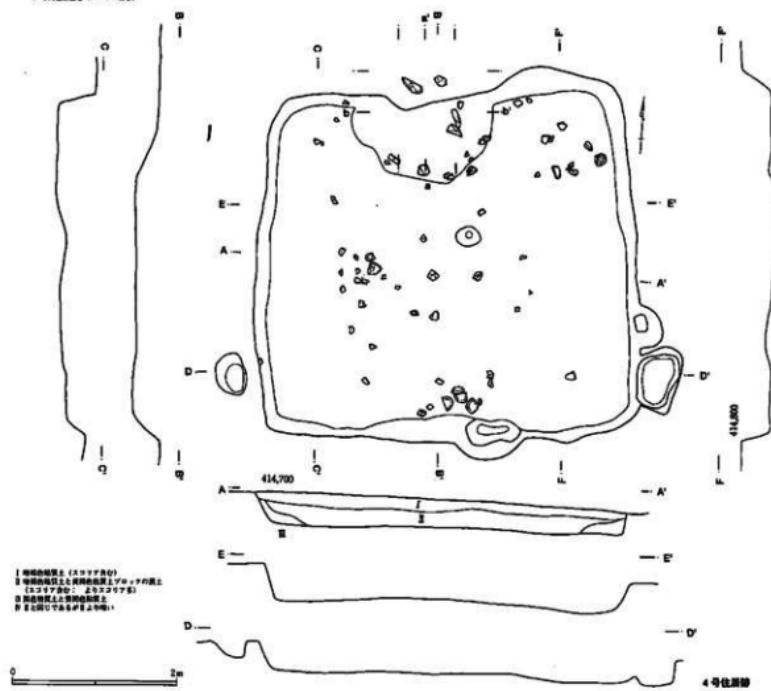
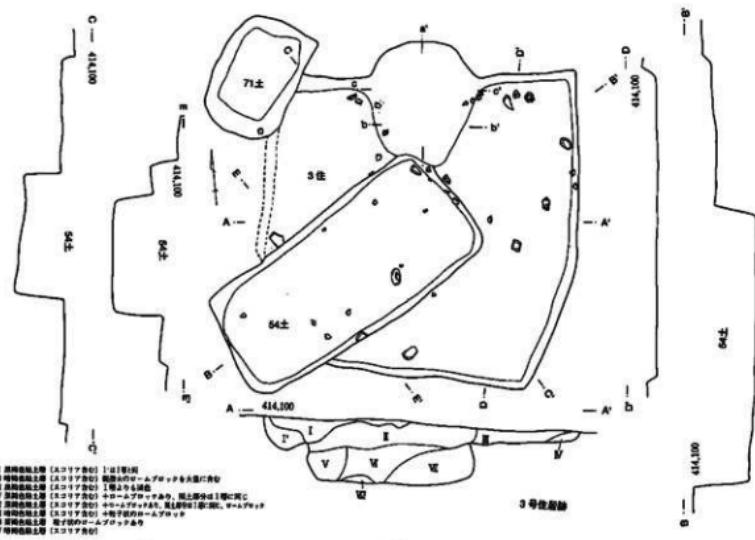
第3図 1号・2号・5号住居跡平面図



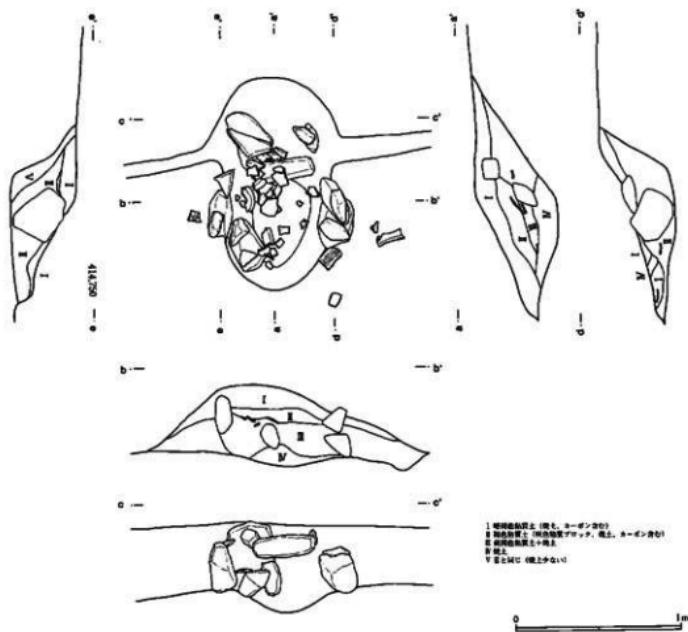
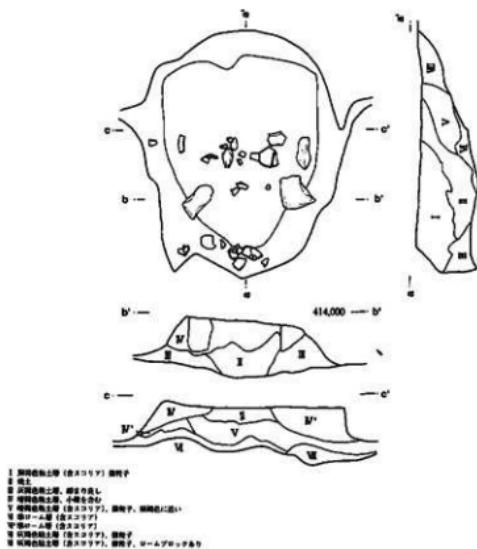
第4図 6号・7号・8号住居跡平面図



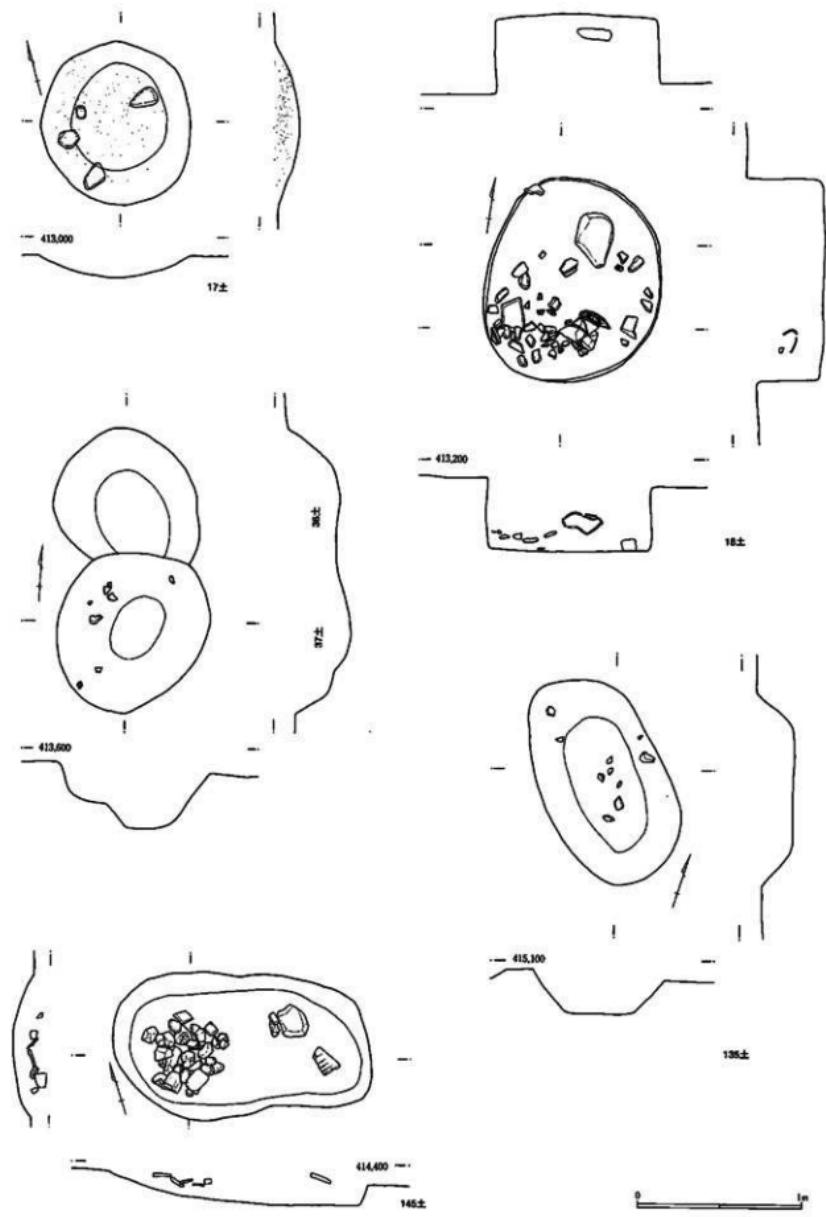
第5図 1号・2号・5号・7号・8号住窯跡



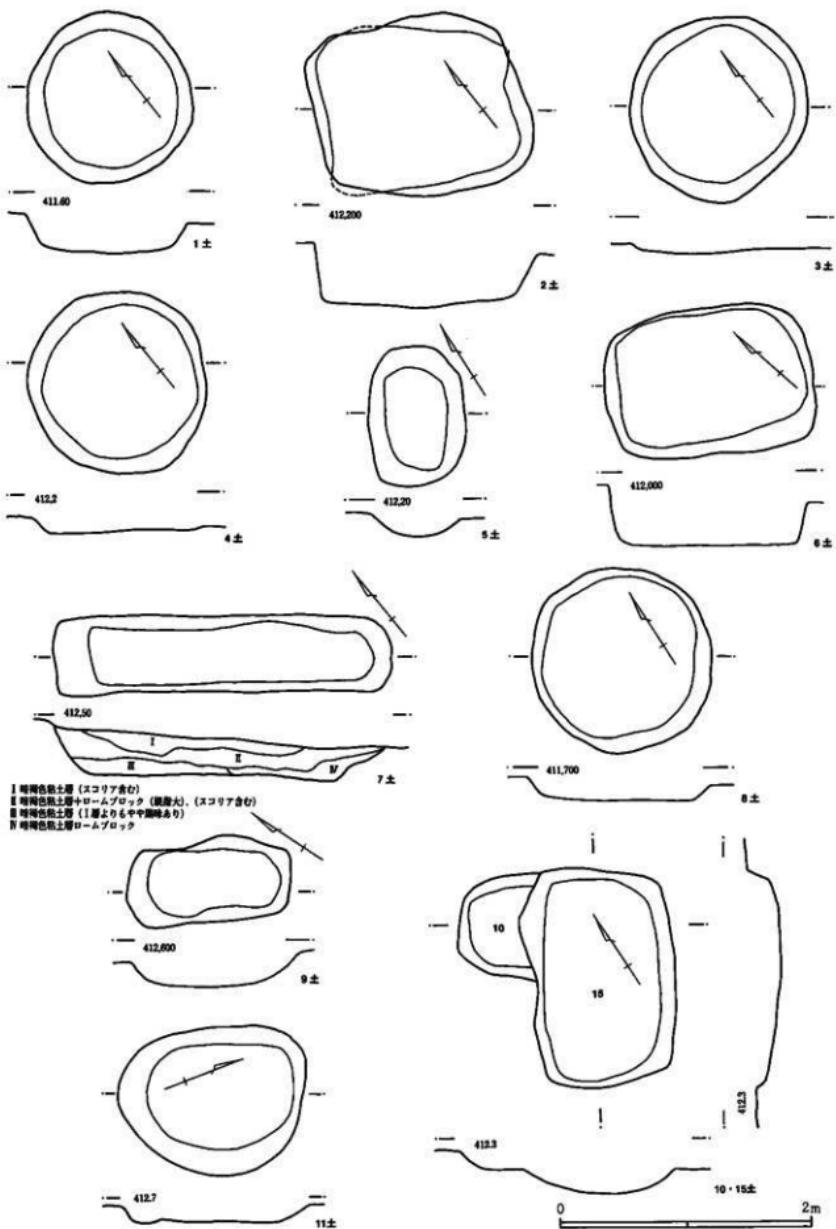
第6図 3号・4号住居跡平面図



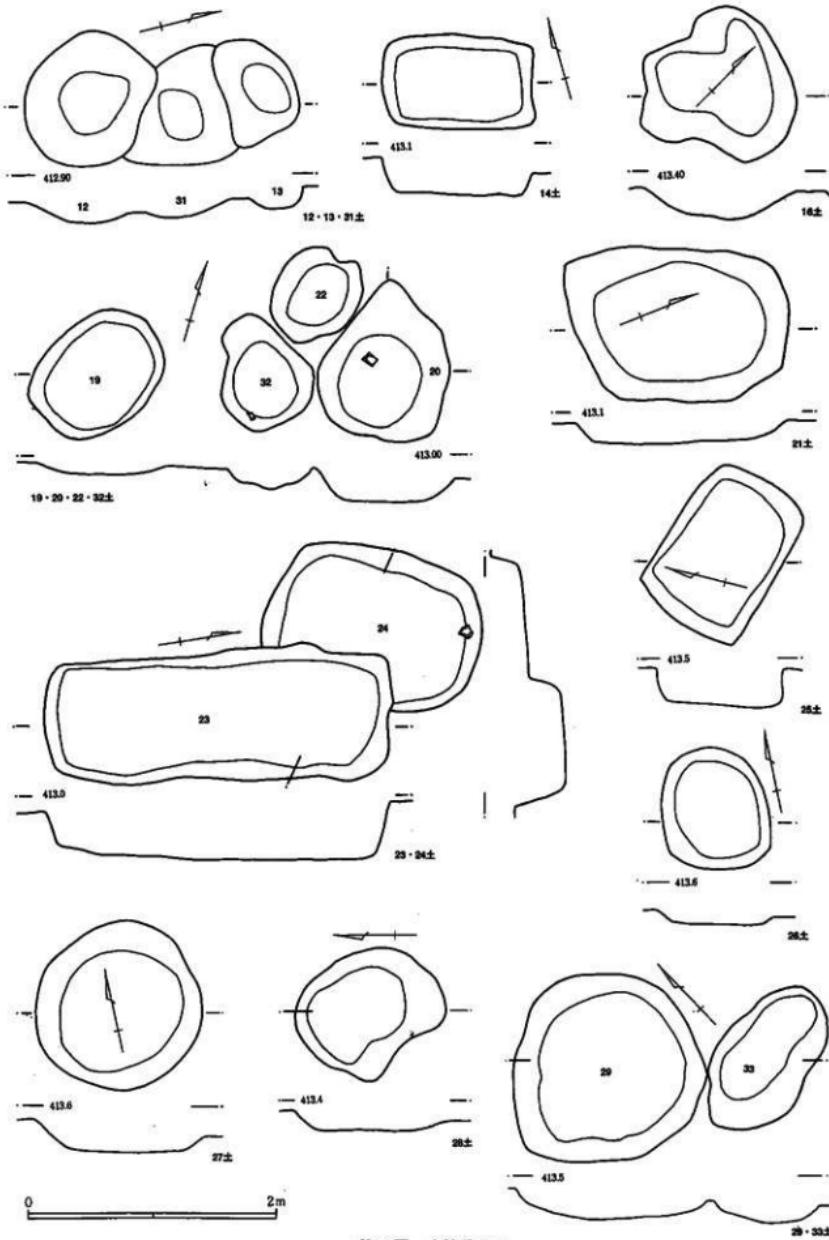
第7図 3号・4号住居跡カマド



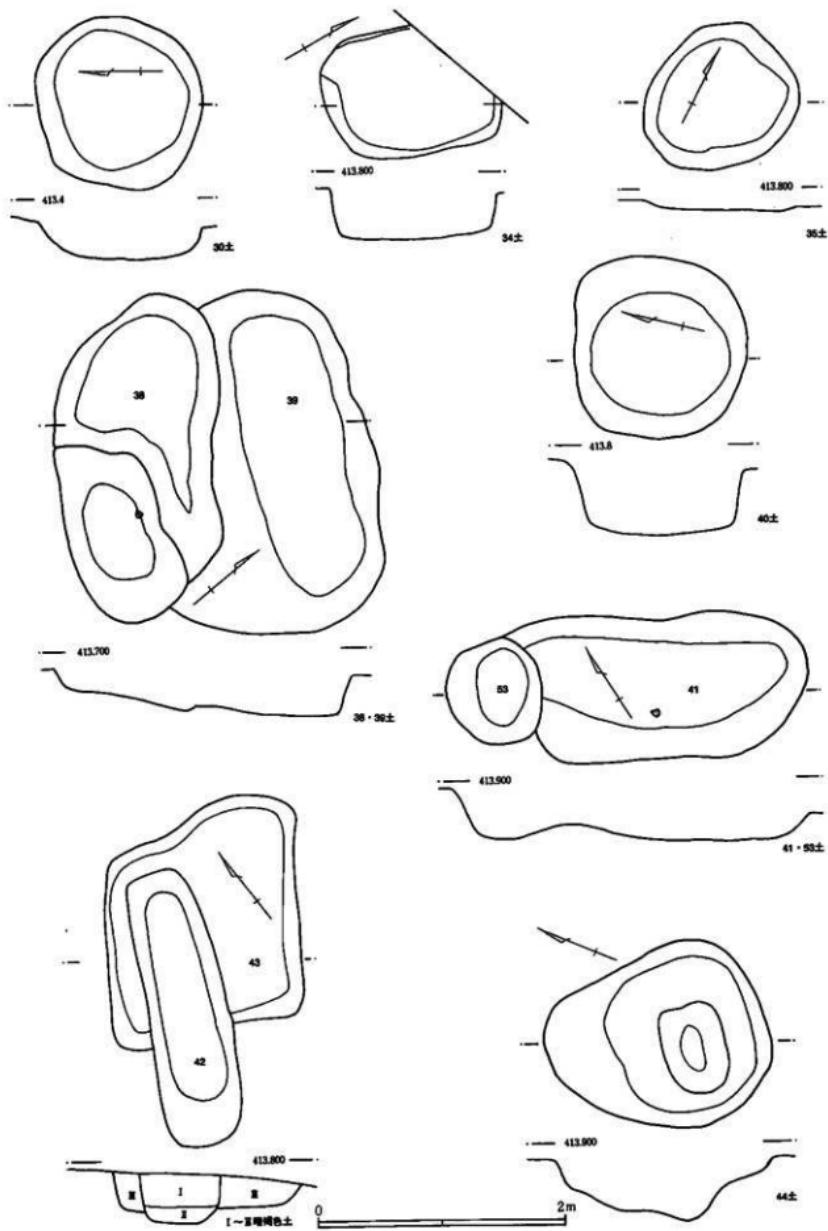
第8図 土坑その1



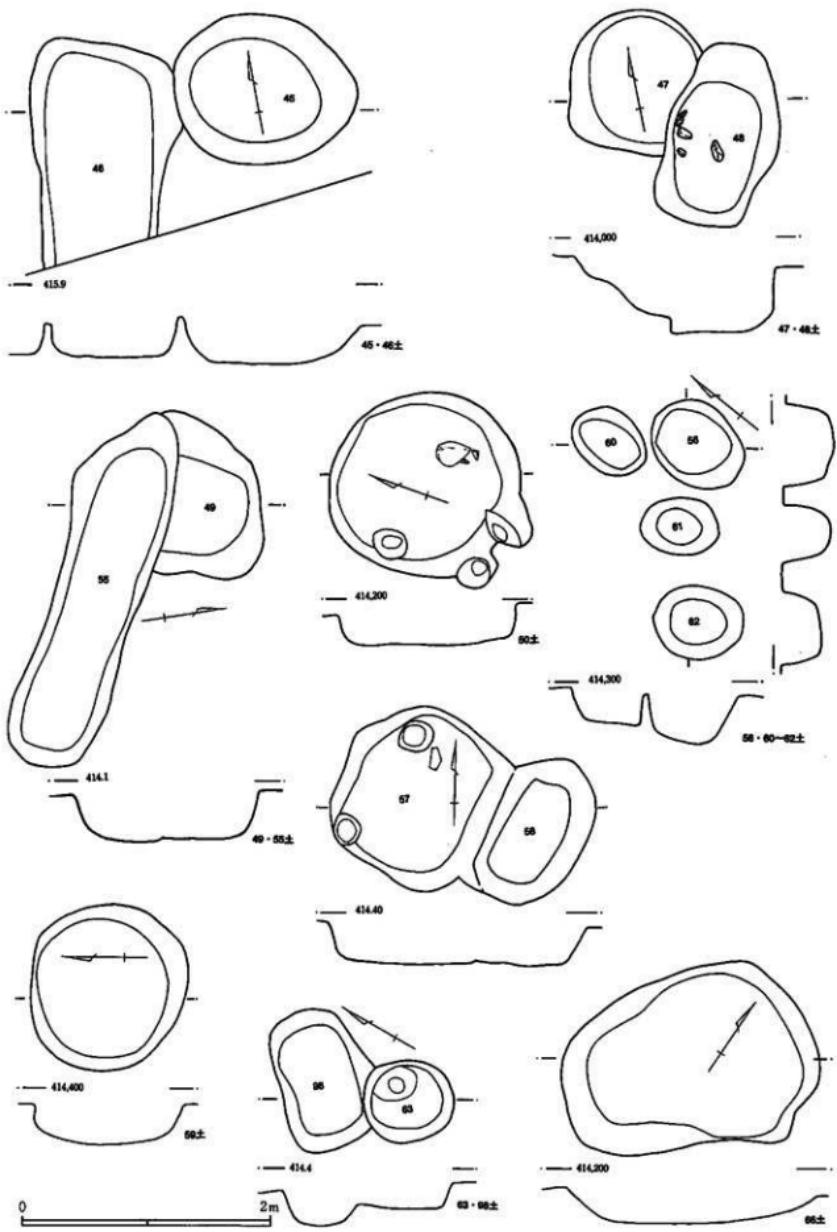
第9図 土坑その2



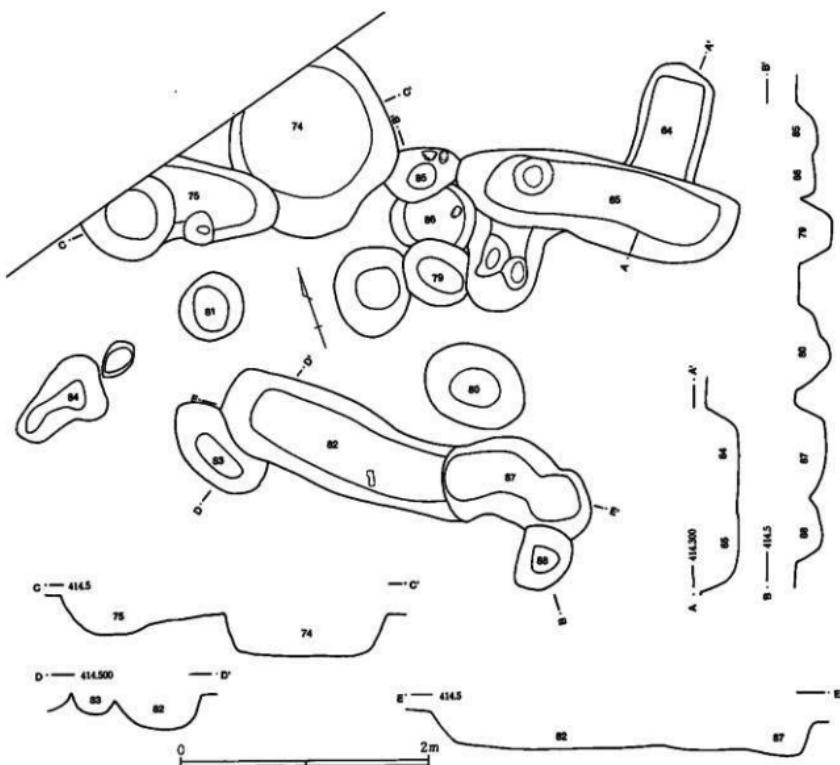
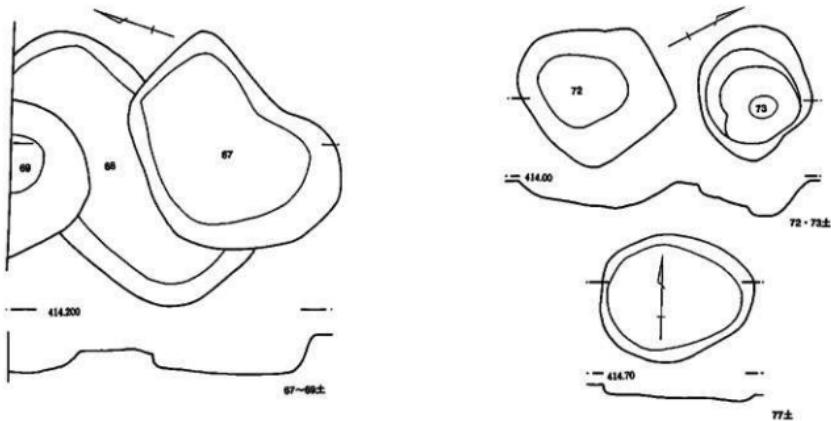
第10図 土坑その3



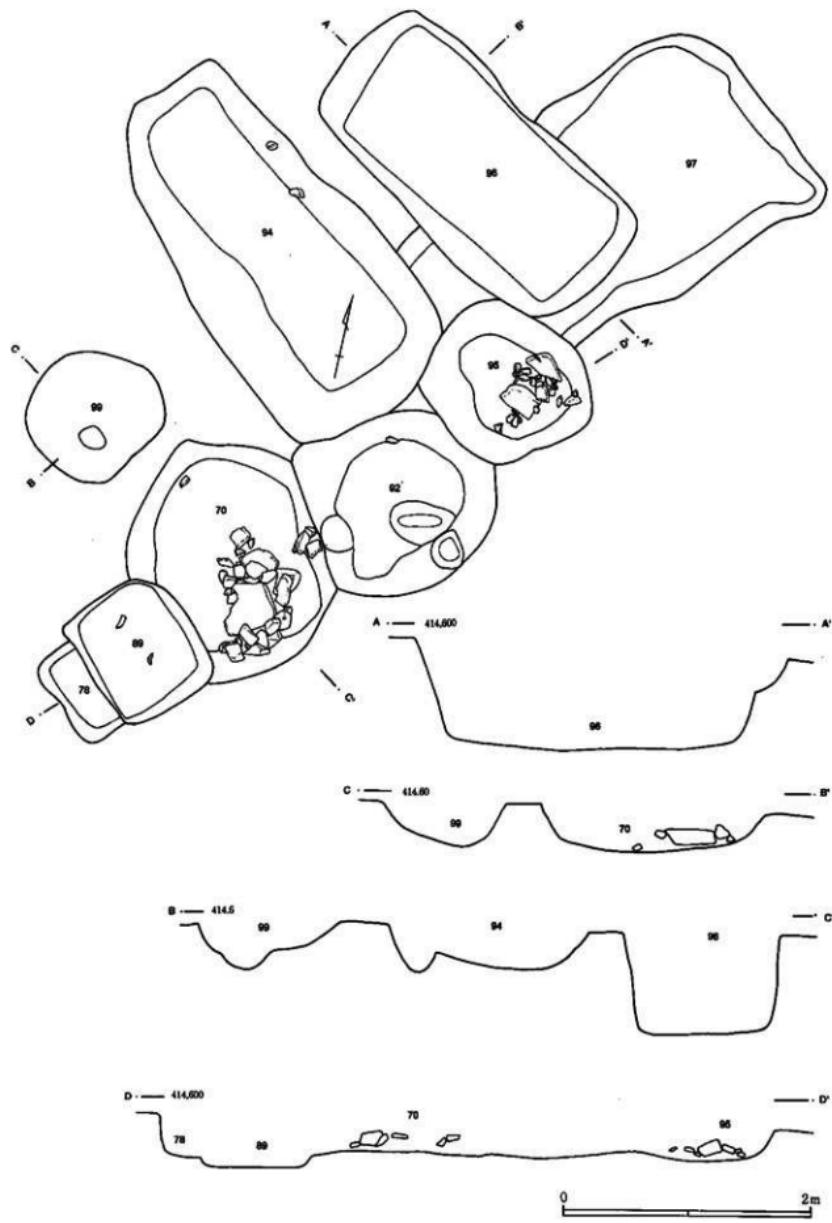
第11図 土坑その4



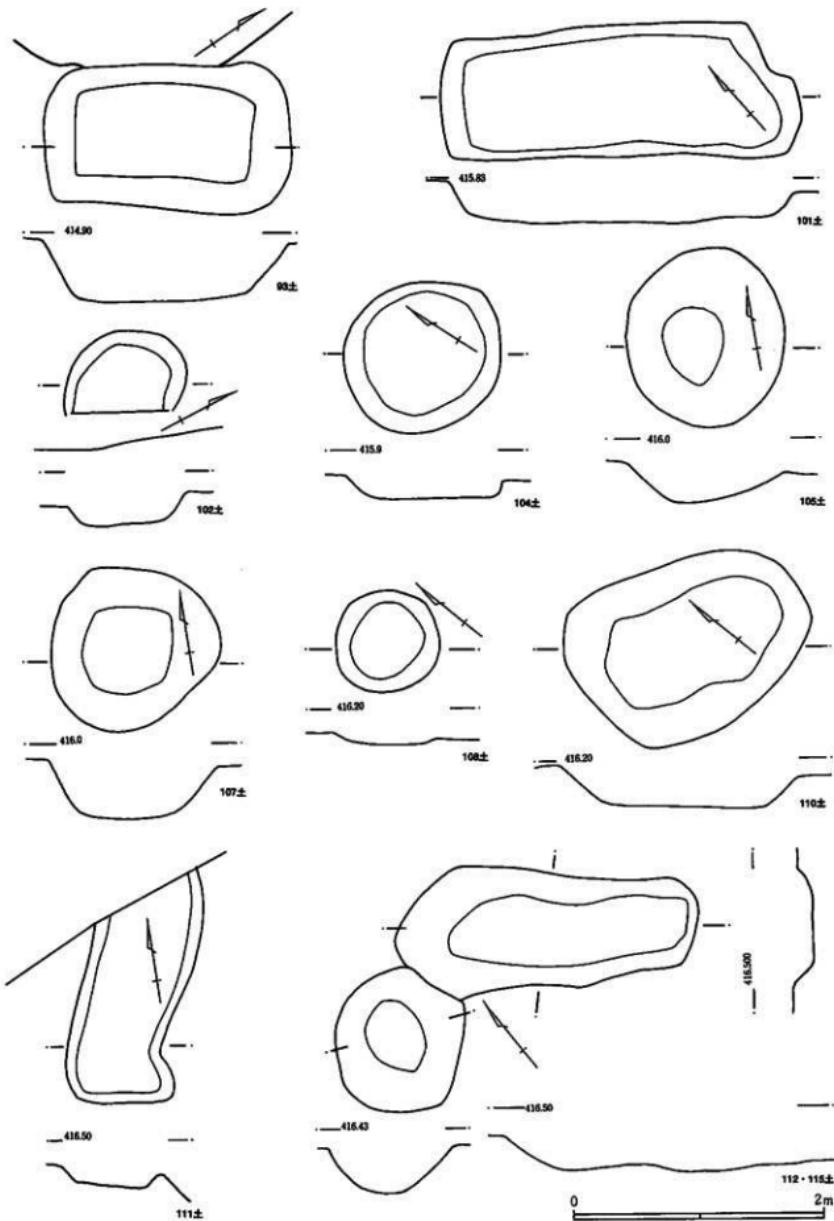
第12図 土坑その5



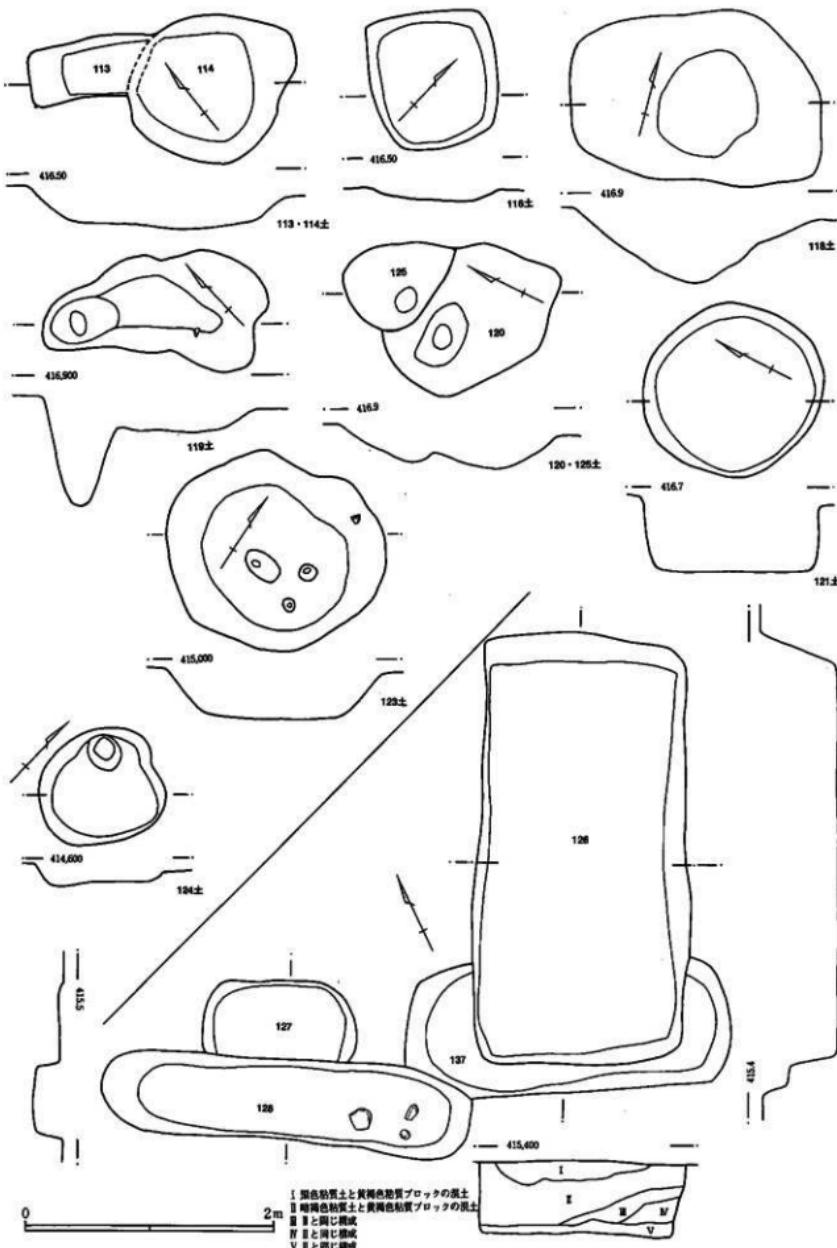
第13図 土坑その6



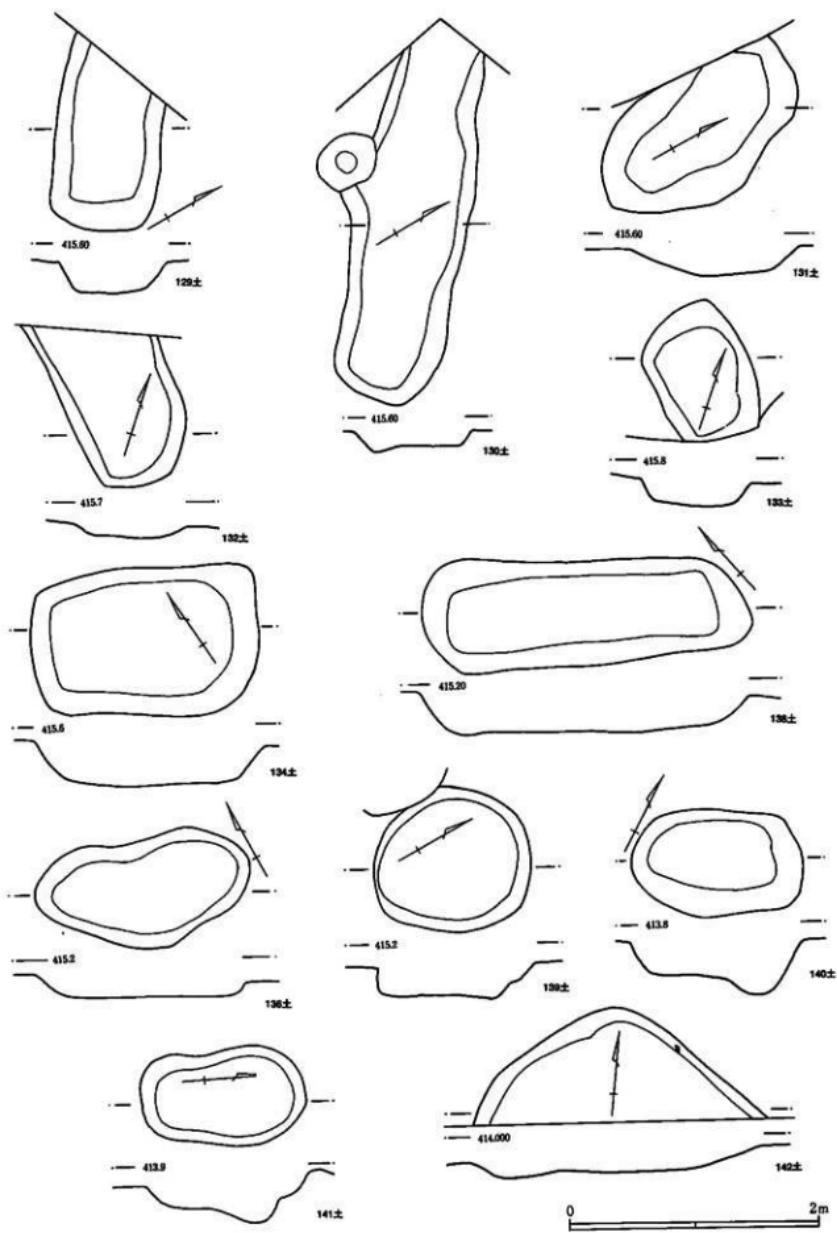
第14図 土坑その7



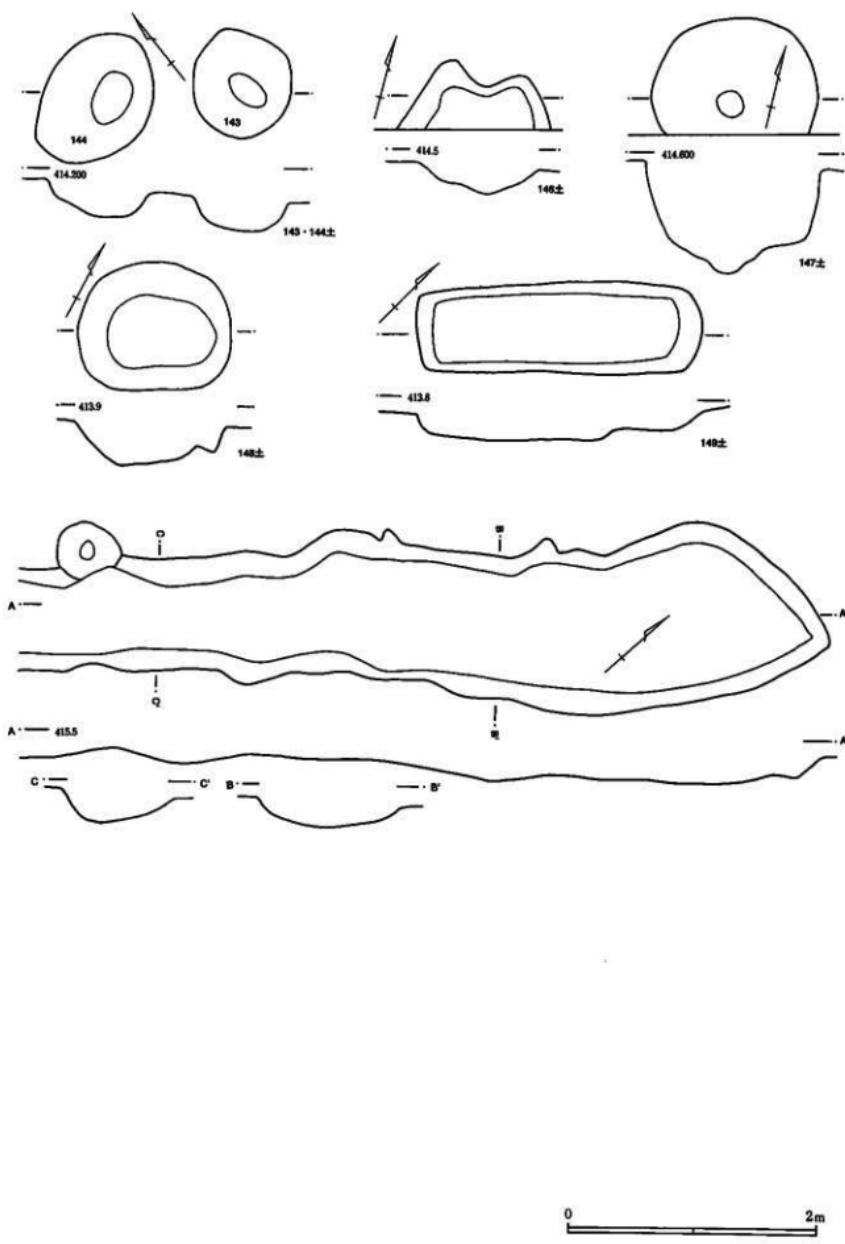
第15図 土坑その8



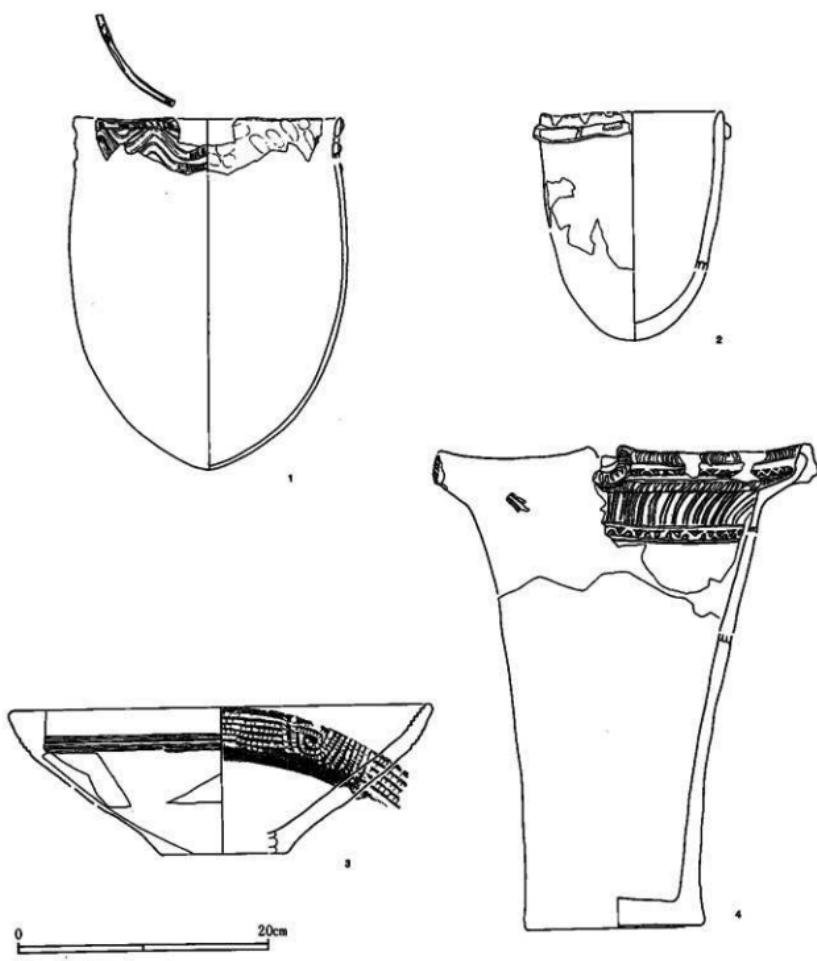
第16図 土坑その9



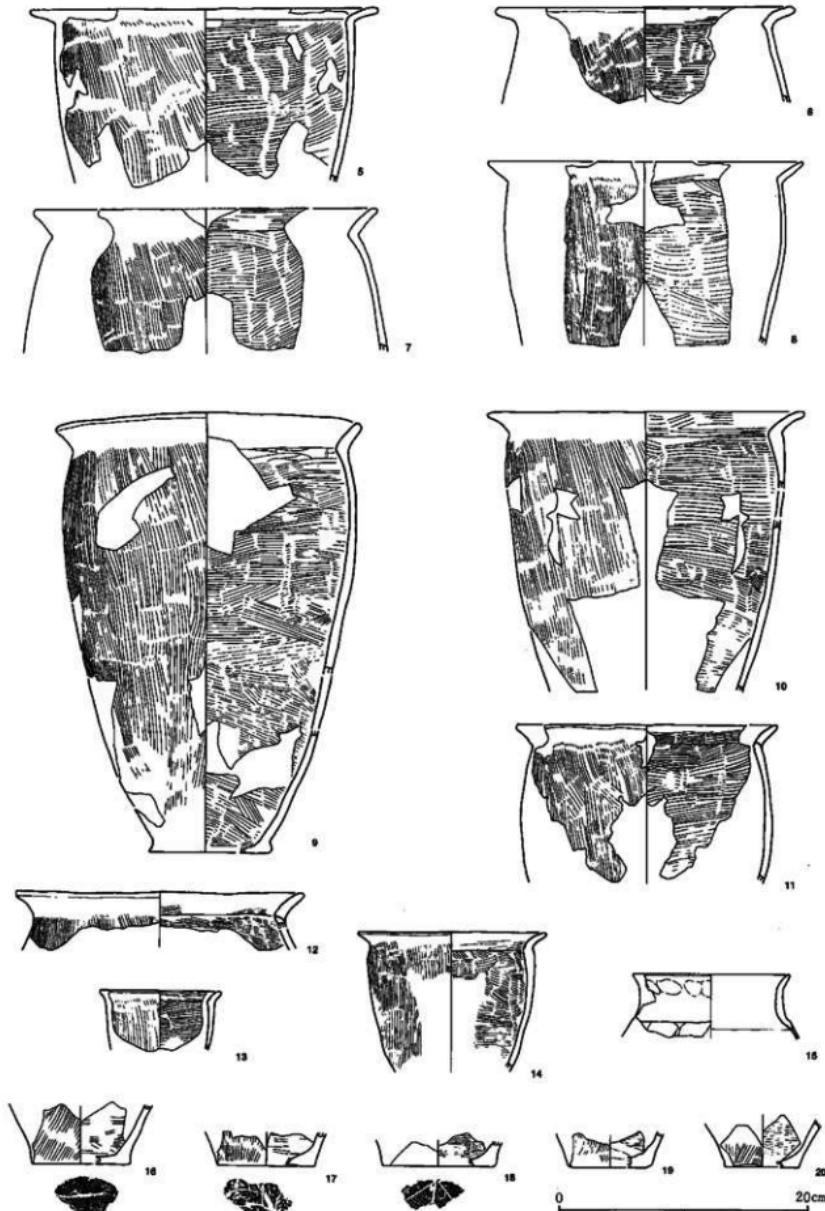
第17図 土坑その10



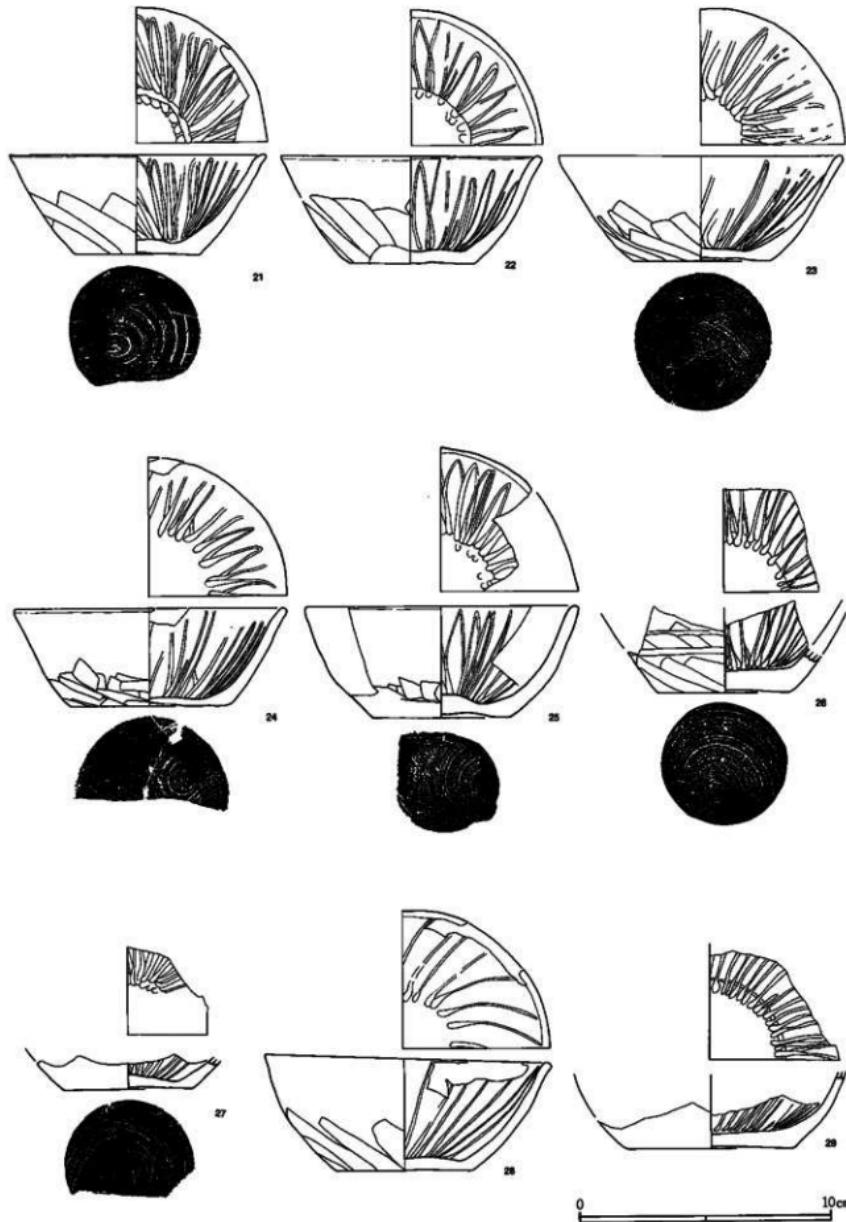
第18図 土坑その11



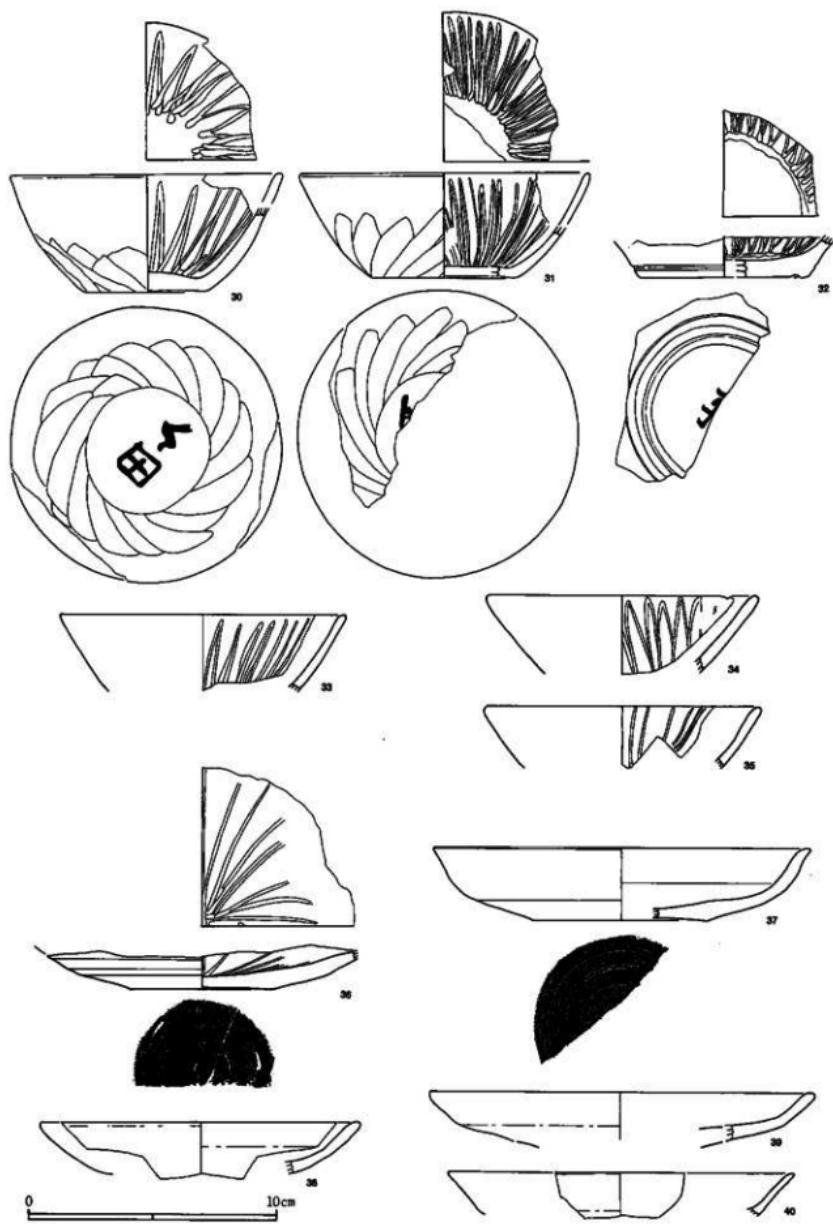
第19図 土器その1



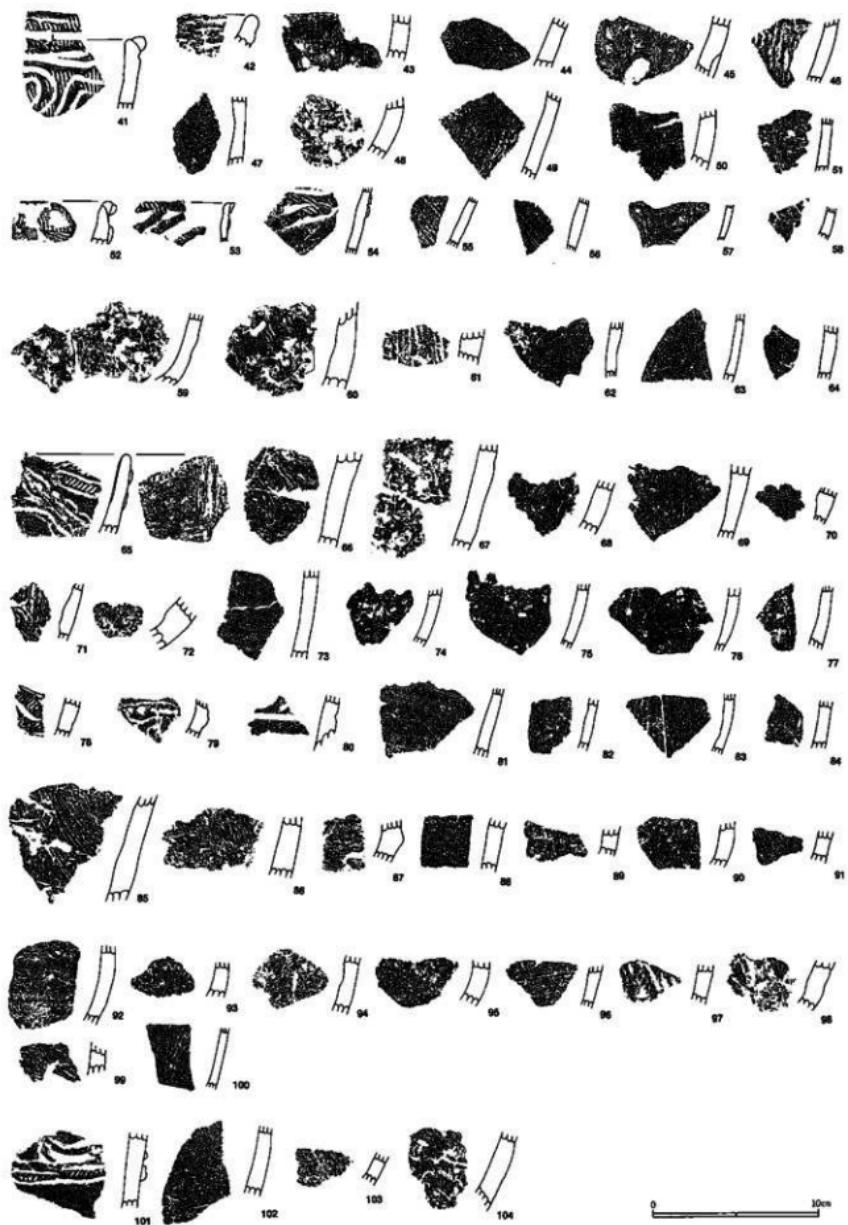
第20図 土器その2



第21図 土器その3



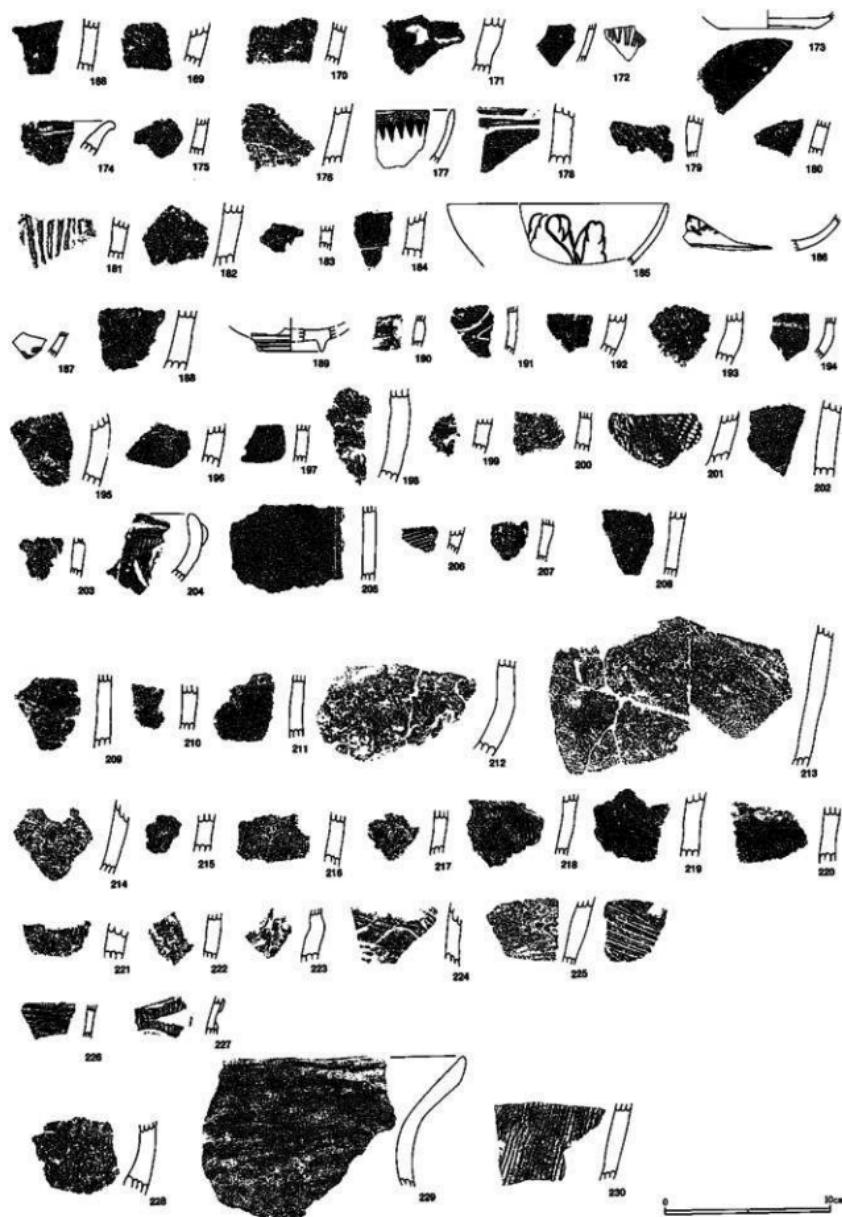
第22図 土器その4



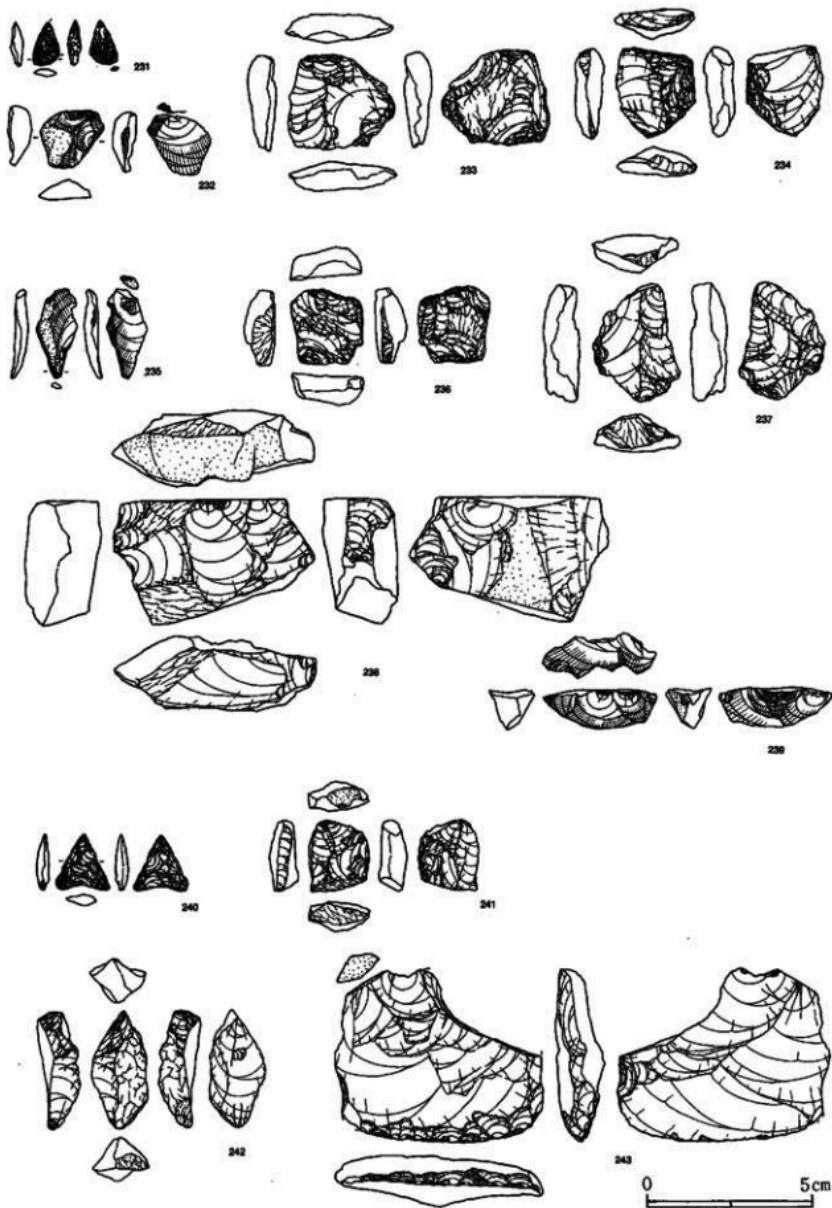
第23図 土器その5



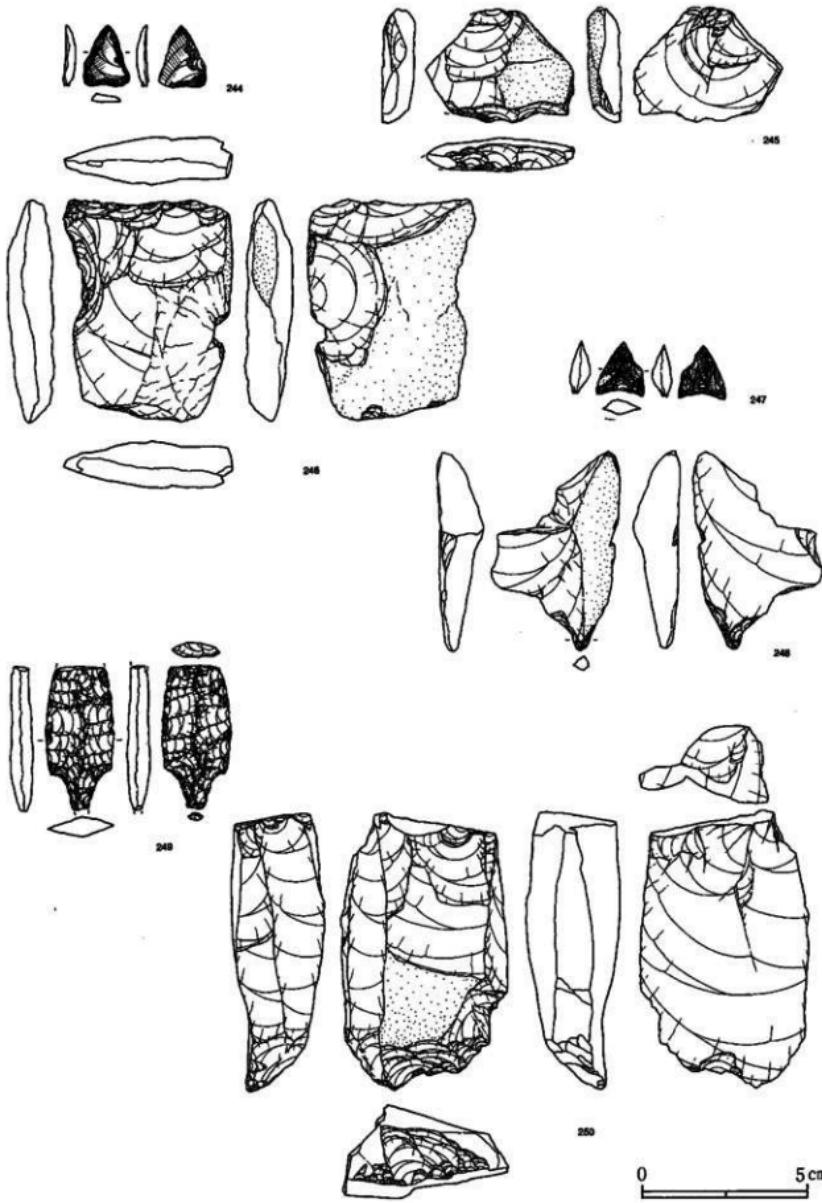
第24図 土器その6



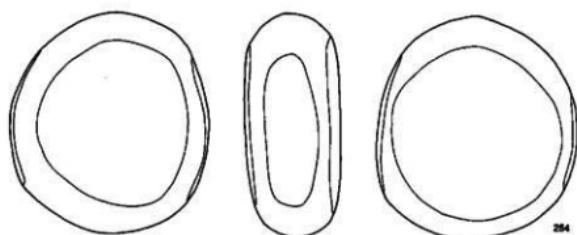
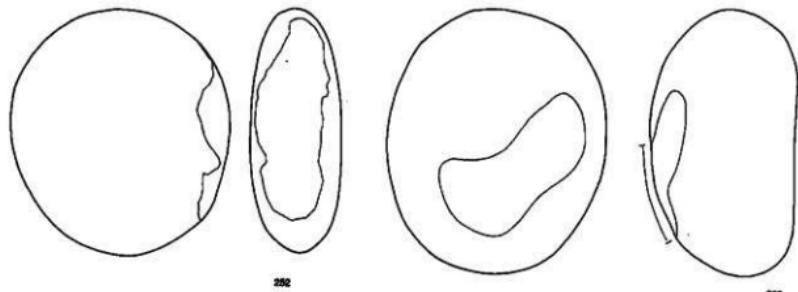
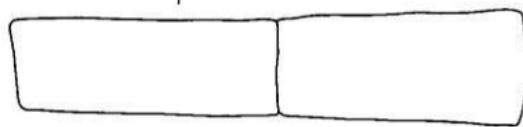
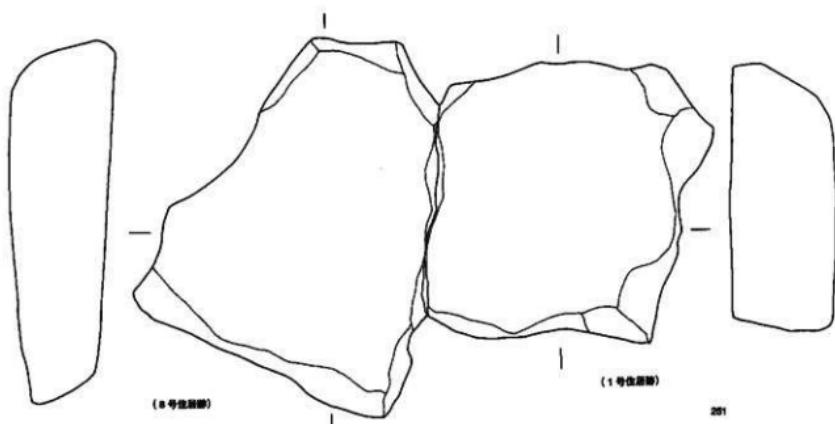
第25図 土器その7



第26図 石器その1

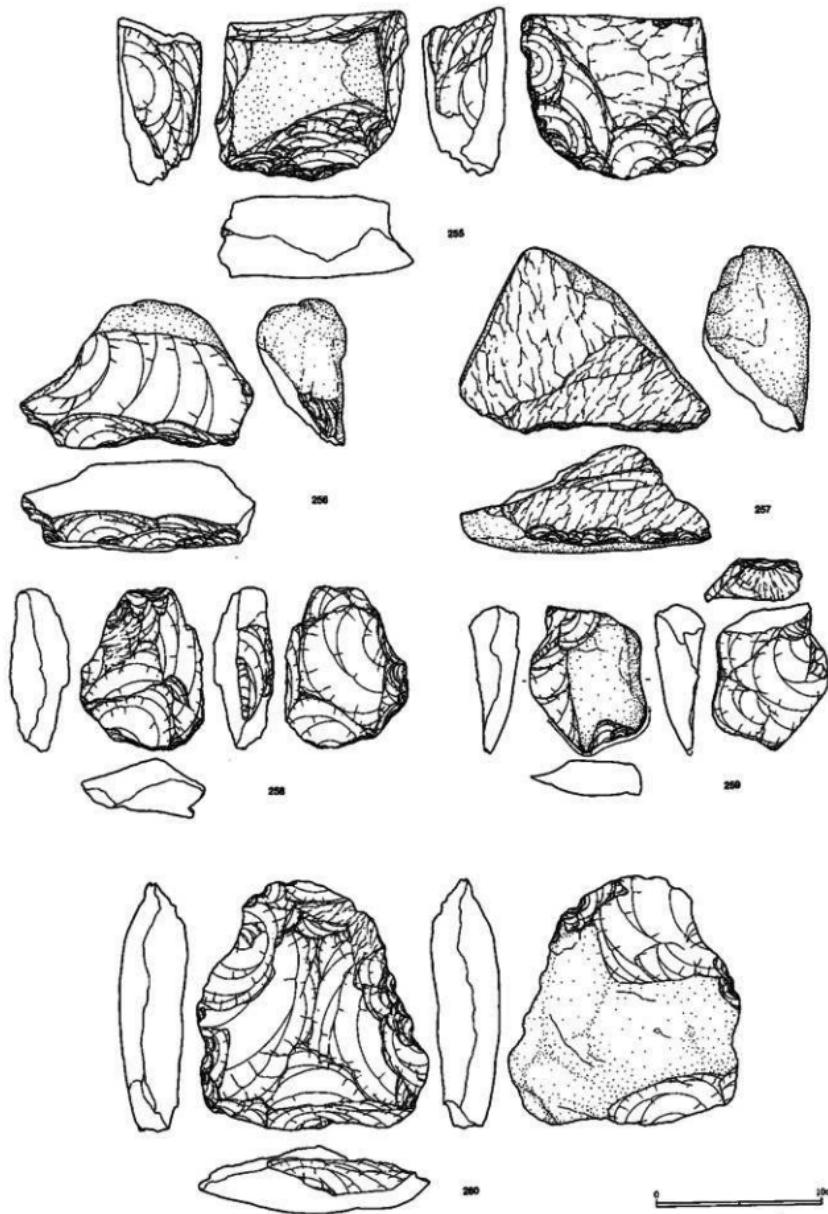


第27図 石器その2

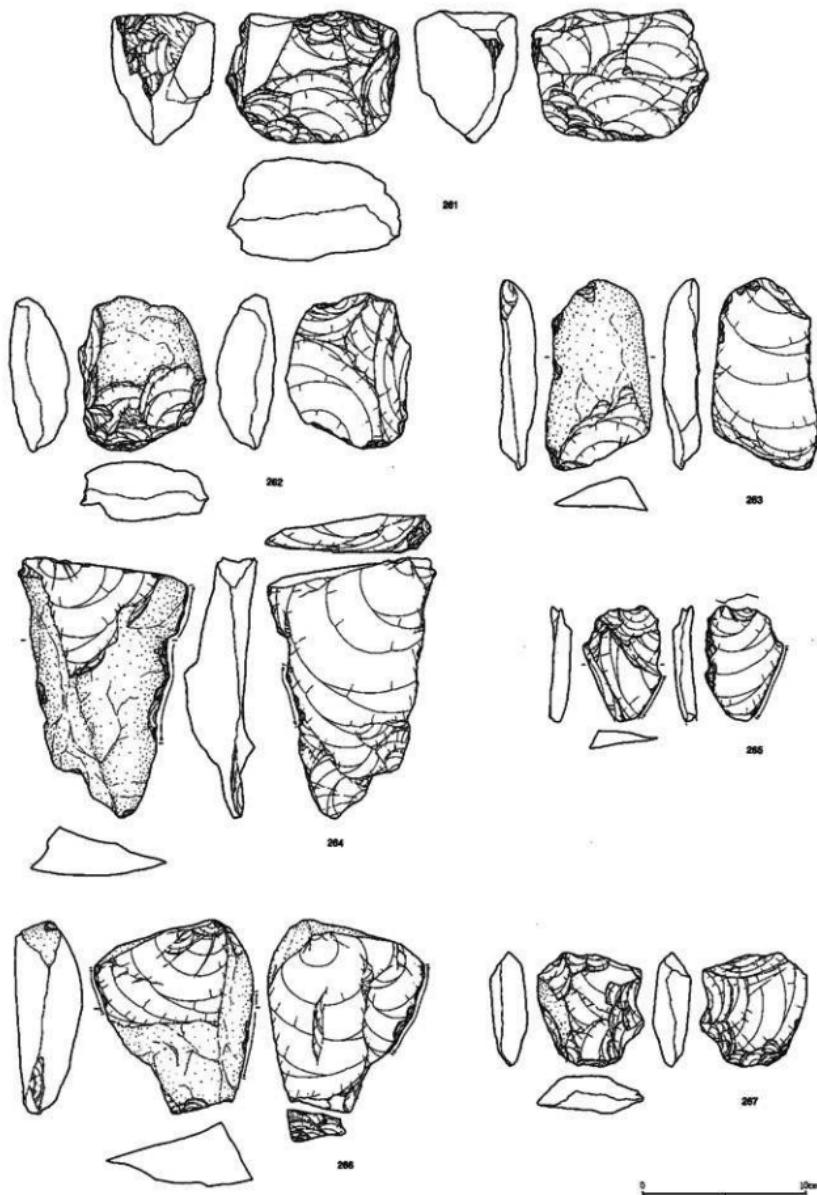


0 5cm

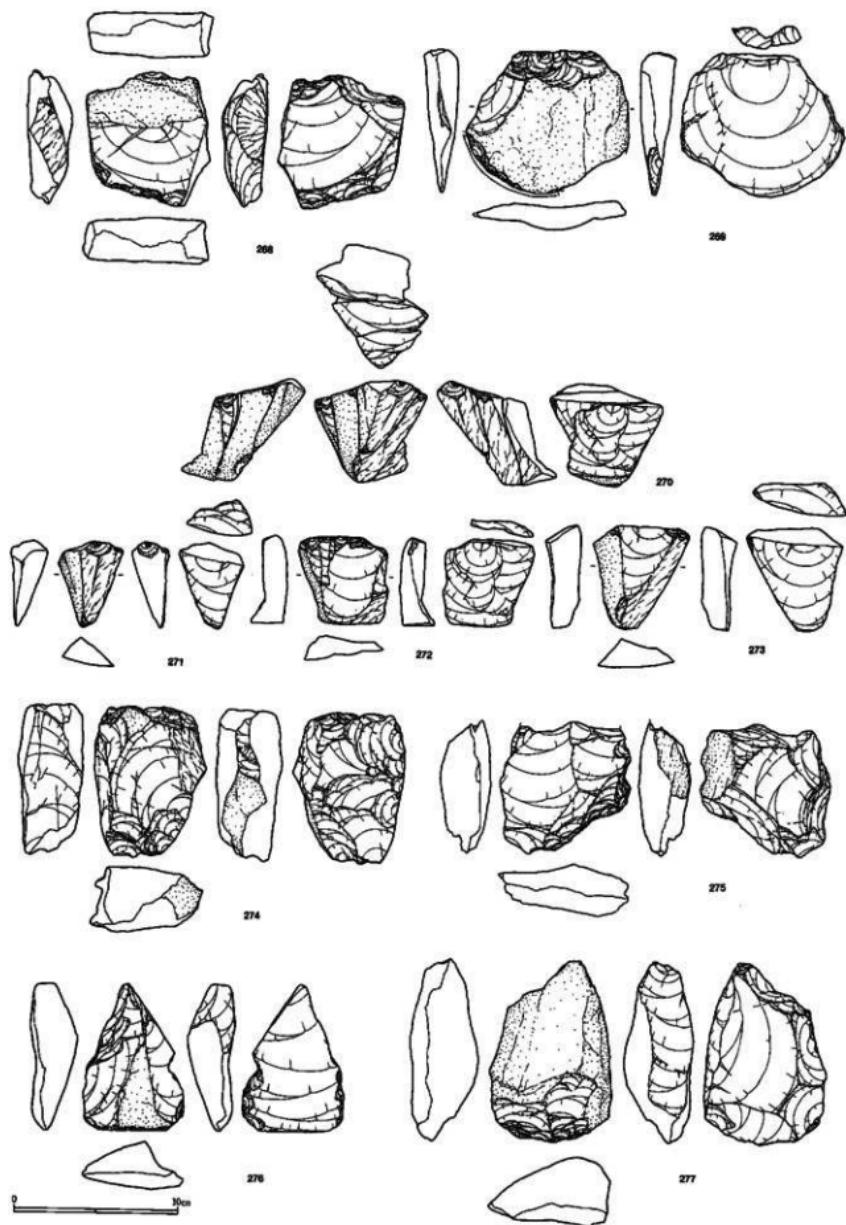
第28図 石器その3



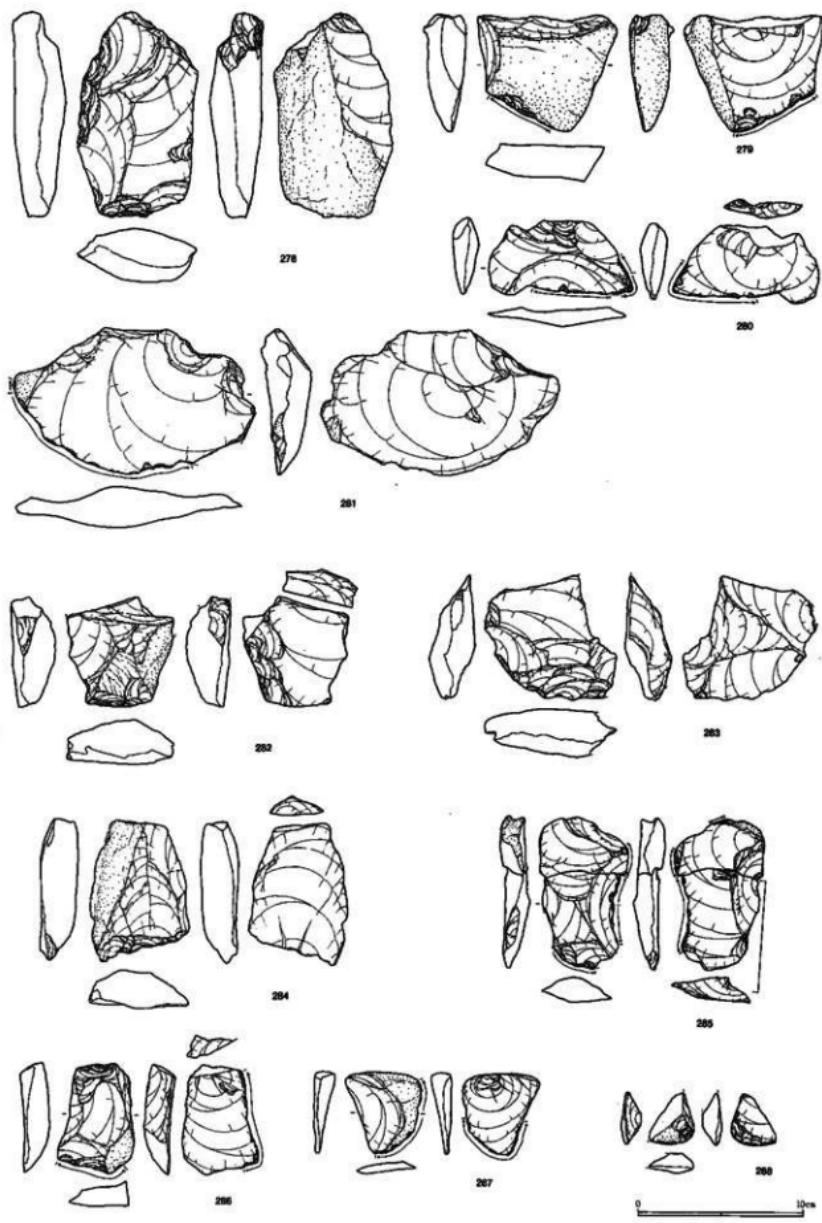
第29図 石器その4



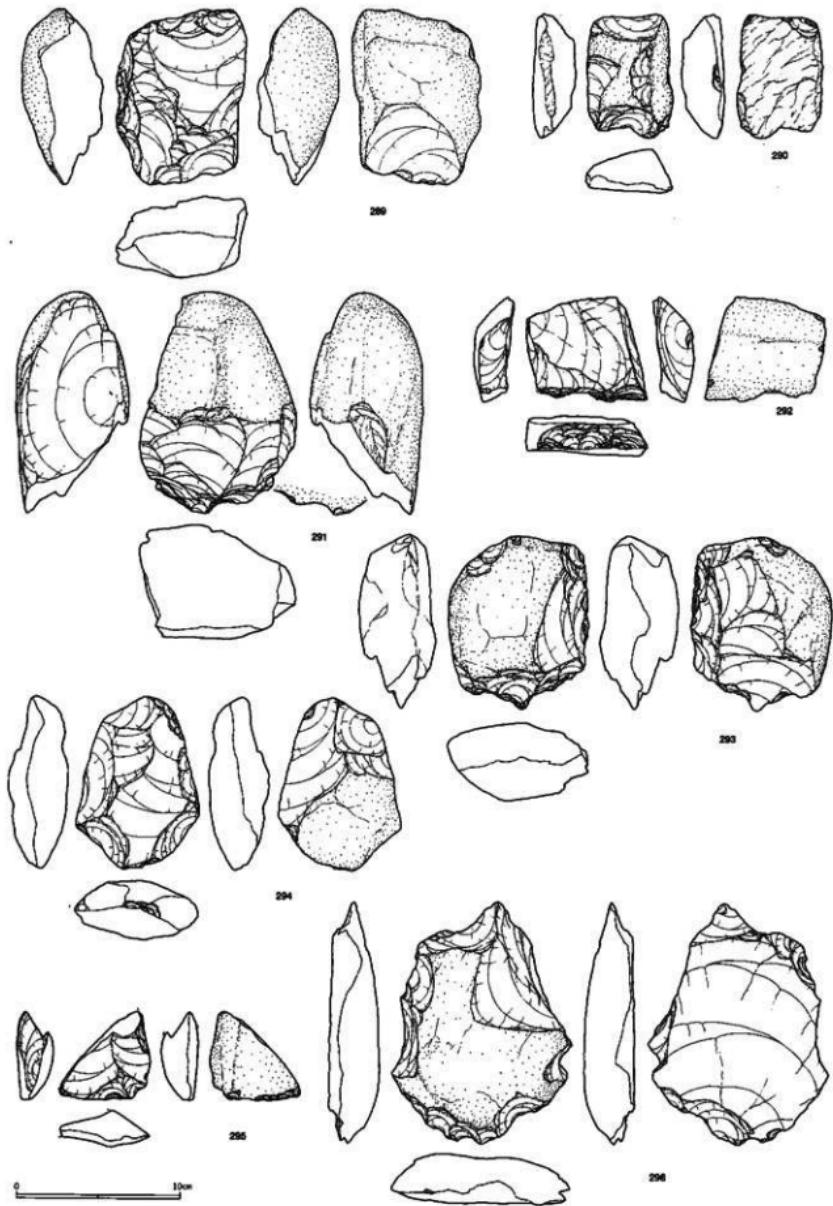
第30図 石器その5



第31図 石器その6



第32図 石器その7



第33図 石器その8

## 第Ⅳ章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

今回の原平遺跡の発掘調査では、縄文時代早期末の住居跡、縄文時代中期初頭の土坑、平安時代の住居跡などが検出されている。このうち、縄文時代中期の土坑については、遺物の出土状況などから墓坑に由来する可能性が指摘されている。また、縄文時代早期末の住居の焼土、および平安時代の住居のカマドからは炭化した種実が出土している。

今回は、上記の遺構の性格や当時の人間の生業活動に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析調査を実施する。調査内容は、縄文時代中期の土坑については動物遺存体の有無を確認するためにリン酸分析を実施する。縄文時代早期末および平安時代住居跡から出土した炭化種実および炭化物の種類同定を電子顕微鏡および光学顕微鏡による観察を行う。

### 1. 18号土坑の用途に関する調査

#### (1) 試料

調査は、縄文時代中期初頭の18号土坑について実施する。本土坑の形状は、平面形が径1.2mの円形、断面形が深さ45cmの長方形を呈している。土坑底部には土器片、礫などが出土しており、その状況から、本土坑の性格として墓坑の可能性が考えられている。

試料は、土坑中央部の覆土断面から、覆土下部～上部にかけて5cm連続で9点の試料が採取された。また、対照試料として土坑を掘り込む地山の土壤2点が採取された。これらの試料から、分析試料として、土坑覆土については最下部の試料から1点おきで合計5点（各々試料番号1～5）、地山2点の合計7点を選択した。

#### (2) 分析方法

リン分析は、土壤養分測定法委員会編（1981）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ベドロジスト懇談会（1984）などを参考にし、硝酸・過塩素酸分解一バナドモリブデン酸比色法で実施した。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩別し、風乾細土試料とする。また、105°Cで4時間乾燥し、分析試料の水分量を求める。

風乾細土1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mLに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。

この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの全リン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）を算出する。

#### (3) 結果

結果を表1に示す。土坑覆土および地山は黒～黒褐色の軽埴土からなる。土坑覆土のリン酸含量は、地山試料と比較して高い。特に覆土中・上部で高くなっている。

表1 18号土坑のリン酸含量

試料	層位・場所	土性	土色	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)
1	土坑底部 (坑底より0~5cm)	LiC	10YR2/2 黒褐	3.03
2	土坑覆土 (坑底より10~15cm)	LiC	10YR2/2 黒褐	3.67
3	土坑覆土 (坑底より20~25cm)	LiC	10YR2/1 黒	3.99
4	土坑覆土 (坑底より30~35cm)	LiC	10YR2/2 黒褐	4.04
5	土坑覆土 (坑底より40~45cm)	LiC	10YR2/2 黒褐	4.11
6	周囲の地山 (対照試料)	LiC	10YR2/3 黒褐	2.75
7	周囲の地山 (対照試料)	LiC	10YR3/2 黒褐	2.80

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による

LiC：軽粘土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

#### (4)考察

縄文時代中期初頭の18号土坑覆土のリン酸含量は、覆土下部で3.03P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/g、上部で4.11P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gを示し、上部に向けて高くなる傾向を示した。

現在の土壤中に含まれるリン酸量（いわゆる天然賦存量）は、Bowen (1983)、Bolt・Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991)などの報告によると、その上限は約3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/g程度と推定される。人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では、5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gを示している（川崎ほか、1991）。また、過去の土壤では、当社の分析調査例に基づくと、骨片が認められる土壤で6.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gを越える場合が多い。これらのことから、リン酸含量が3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gを著しく越える土壤では外的要因（特に人為的影響によるもの）によるリン酸の富化が指摘される。

今回の土坑覆土のリン酸含量は、上記した天然賦存量とほぼ同等、あるいはそれ以上の値を示していることになる。また、このリン酸含量は、土坑が構築されている地山堆積物のそれと比較して明らかに高い値となっている。これらのことと、本遺構が構築された縄文時代中期初頭以降の経年変化（成分の溶脱など）を考慮すると、今回の土坑覆土中にはリン酸が富化していると推定される。すなわち、本遺構内に動物遺存体が埋納されていた可能性がある。ただし、リン酸含量値が、覆土上部に向けて高くなっていることから、後代の土壤攪乱の影響が及んでいる可能性もある。このことに関しては、発掘調査所見と合わせた検討が必要である。

## 2. 住居跡出土炭化物の種類

#### (1)試料

試料は、縄文時代早期末の7号住居跡の焼土から出土した炭化種実・炭化物、平安時代の3号・4号住居跡のカマドから出土した未炭化種実・炭化種実・炭化物である。試料の詳細は結果と共に示す。

#### (2)分析方法

試料は、肉眼あるいは双眼実体鏡で観察し、形態的特徴から種類を同定する。また必要に応じて電子顕微鏡による観察を行い、表面・断面構造から種類の同定を行った。

#### (3)結果

結果は表2に示す。試料番号1はチャノキ、試料番号4~6がミズキ、試料番号9~10はオニグルミに同定される。同定された種類とその形態的特徴を以下に述べる。

##### ・チャノキ (*Camellia sinensis* (L.) O.Kuntze)

破片で、全体の1/3ほどが残っている。全体の形状は球形で、大きさ1cm程度。表面は薄くて堅く、やや光沢がある。大きな「へそ」がある。他の炭化物と比較して保存状態が非常に良いのが特徴である。

##### ・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley)

完形に近いものから、半分程度しか残っていないものまである。大きさは4mm程度で、縦方向にややつぶれた球形。基部に大きな「へそ」がある。縦方向に走る深い溝がみられる。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura)

試料番号9は約1/3ほどが残っているが、試料番号10は細片である。木質で堅く、表面は粗いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

なお、試料番号2・3・7・8はいずれも数mm以下の炭化物で、表面模様など形態的特徴に乏しく、同定不能である。また、試料番号11は大きさ数cmの板状炭化物である。木の皮、木の瘤などが考えられるが、組織や表面模様とも特徴がなく、種類を特定できない。

表2 出土種実の種類

番号	遺構・場所	備考	種類
1	3号住居跡	平安時代	チャノキ
2	4号住居跡	カマドⅠ層 平安時代	不能
3		カマドⅡ層 平安時代	不能
4	7号住居跡	焼土 繩文時代早期末	ミズキ
5		焼土 繩文時代早期末	ミズキ
6		焼土 繩文時代早期末	ミズキ
7		焼土 繩文時代早期末	不能
8		焼土 繩文時代早期末	不能
9		焼土 繩文時代早期末	オニグルミ
10		焼土 繩文時代早期末	オニグルミ
11		焼土 繩文時代早期末	不能

(4) 考察

縄文時代早期末の7号住居跡の焼土から出土した炭化物は、ミズキとオニグルミに同定された。

このうち、ミズキは全国各地の遺跡から多くの出土例があり、山梨県内でも中溝遺跡（松谷、1996）や花鳥山遺跡（笠原・藤沢、1989）などで検出されている。ミズキの核は、堅いために小さく残りやすい。生育箇所として林縁部など人里近くを好むために集落内に種実が入りやすい。また、形が特徴的なので発見されやすい。これらの点から、出土報告が多いと思われる。このように残存し易いとはいえ、焼土中から出土していることは当時の人間に利用されていた可能性がある。笠原・藤沢（1989）は、花鳥山遺跡ではまとまった状態で多数出土していること、果実が甘味であることから、果実を生食していたことを指摘している。本遺跡での出土状況もそれと類似することから同様の利用が考えられる。

オニグルミは、多くの出土例が知られており、前述の花鳥山遺跡でも検出されている（渡辺、1989）。生食可能で貯蔵も利くことから、古くから食用にされる。オニグルミの核は焼くと割れやすくなるために、調理の一貫として燃やす場合もあるが、今回のものは内部にまで火が通っていることから、食べ残った殻を燃やしたものである可能性が高い。

平安時代の3号住居跡から出土した未炭化の種実はチャノキに同定された。本種は遺存状態が良く、風化をあまり受けていない点から、遺構が埋積する過程で入り込んだ後代のもの可能性がある。4号住居跡出土の炭化物は、Ⅱ層出土のものはウメ・モモの可能性が考えられていたが、同定の結果、遺存状態が良くなく、種類の同定を行なうことができなかった。Ⅰ層についても同様な結果であった。

以上、各時期・遺構から出土した炭化物について、種類同定を行なったが不明なものも多かった。これらについては、再度電子顕微鏡などを利用して検討を加えていくことにする。

<引用文献>

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen,H.J.M. (1983) 環境無機化学—元素の循環と生化学一. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博文社 [Bowen,H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 土壤の化学. 岩田進午・三輪喜太郎・井上隆弘・陽捷行訳, p.235-236., 学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY].
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 土壤養分分析法. 440p., 齋賀堂.
- 笠原安夫・藤沢 浅 (1989) 花鳥山遺跡出土の炭化種実塊ならびに微小種子の同定. 「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集 花鳥山遺跡 水呑場北遺跡 笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書」, p.129-136, 山梨県教育委員会・関東農政局笛吹川農業水利事業所.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 松谷暁子 (1996) 中溝遺跡から出土した炭化植物について. 「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第115集 中溝遺跡 掖久保遺跡 山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書」 p.49-53, 山梨県教育委員会・日本鉄道建設公團.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, p.39-40.
- 渡辺 誠 (1989) 花鳥山遺跡出土の自然遺物. 「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第45集 花鳥山遺跡 水呑場北遺跡 笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書」, p.137-150, 山梨県教育委員会・関東農政局笛吹川農業水利事業所.

## 第V章 まとめ

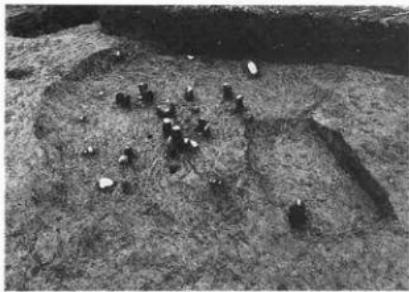
冒頭の例言でも述べたように、本遺跡は当初西の上C遺跡とされていたが、西の上C遺跡は全く別の尾根に位置しており、大月市教育委員会の調査でも隣接地を原平遺跡としていることから、今回の調査区も原平遺跡の一部と認識し、これまでの大月市教育委員会の調査成果もあわせて問題点を整理しておきたい。

まず、集落規模の問題である。前述したように、原平遺跡は今回が第3次調査となる。これまでの調査は、山梨日本電気株式会社大月工場建物部分の3万m<sup>2</sup>に及ぶ発掘調査が第1次、工場従事者のための簡易駐車場造成部分が第2次である。いずれも大月市教育委員会によるもので、第1次調査では縄文時代早期末（神之木台・下吉井式期）としては希有な60軒（未整理なため確定数ではない）ものの大集落が確認され、この集落がどこまで広がるのかその範囲・規模が注目されていた。2次調査のうちの一ヵ所は今回の調査区の隣接地であり、集落の広がりを確認するのにも好都合な位置ではあったが、予想に反して、早期末の住居跡は1軒だけの確認であった。そして今回の調査域は集落本体からさらに離れることと調査面積が大月市教育委員会の調査域の半分程度であることなどから、早期末の遺構はほとんど期待できないと予想していた。しかし、今回の対象地域が土砂を削り取る前提であることから、最終的に暗褐色土を徹底して除去しローム層まで削りながら遺構確認を行う作業を行ったため、早期末の住居跡6軒、土坑数基を確認することができた。しかも、早期末の住居跡のうちの3軒は大月市教育委員会による調査区域に一部がまたがっていることも確認された。これらの状況から、大月市教育委員会の調査区域では、暗褐色土中のプラン確認が困難なことも事実であったため、掘り込みの浅かった住居跡だけが調査され、深い住居跡については手付かずの状態であることが推察される。現在のような簡易駐車場なら問題はないものの、今後構築物建築時には再調査が必要となろう。さて、面積その他の条件からすれば、今回の調査成果と比較して、隣接する大月市教育委員会調査区域だけでも數軒の住居跡の存在が予想される。それからすれば工場建物本体が建設された集落中心部分にも劣らないほどの集落の濃さが想定されるが、原平遺跡全体として考えた場合、恐らく最低に見積もっても100軒にも及ぶ大集落の姿が浮かぶ。これまで早期末の集落として、このような規模で確認された例を知らない。さらに本県では近接する中溝遺跡で7軒、駅迎堂遺跡群で38軒された例が挙げられるが、本県での該期の集落密度は群を抜いていると言う事ができる。

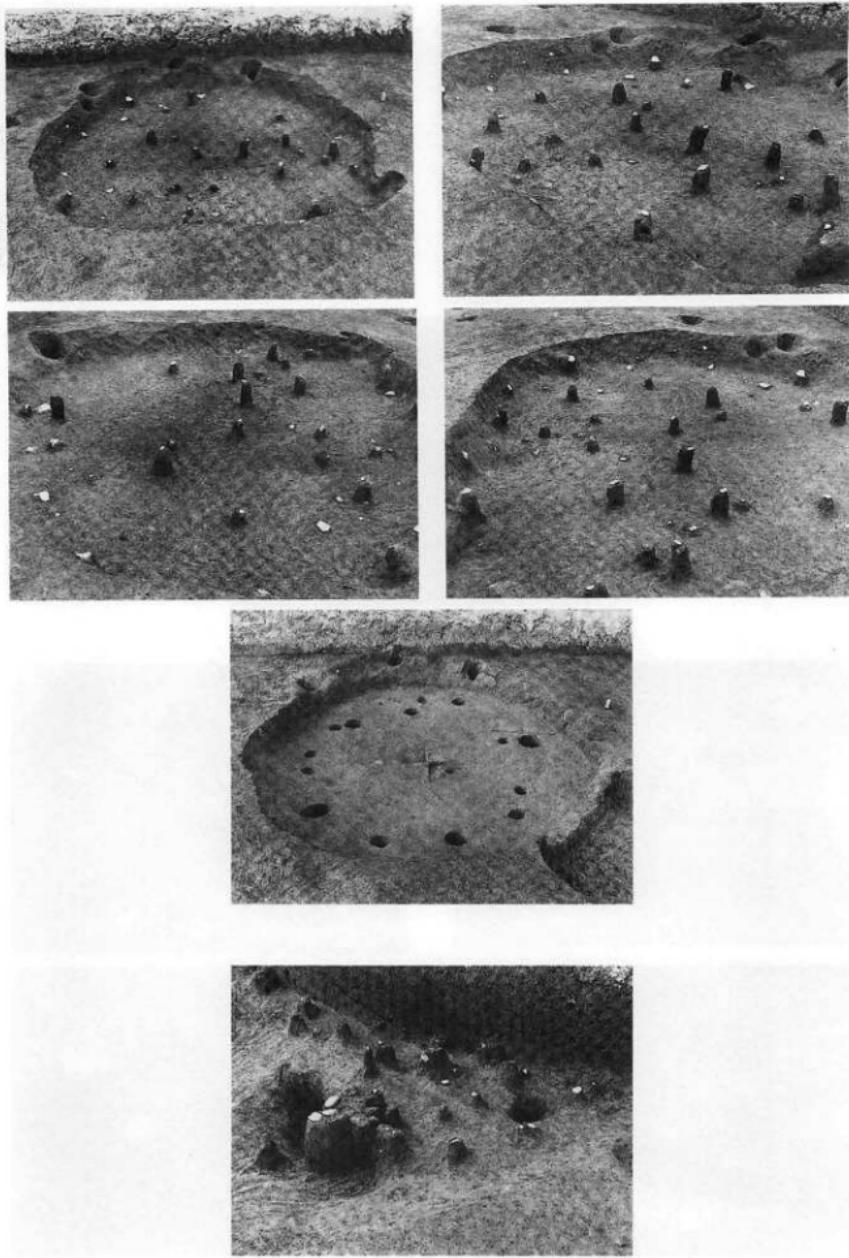
土器の様相では、本遺跡や中溝遺跡と笛子峠を越えた甲府盆地の駅迎堂遺跡群とで大きな違いがみられる。海綿体骨針を含む下吉井式土器の有無である。本遺跡や中溝遺跡では、今回の調査も含めて、下吉井式土器には海綿体骨針を含む破片が多く確認される。しかし、駅迎堂遺跡資料中には海綿体骨針を含む下吉井式土器はほとんど確認できない。海綿体骨針は、神奈川県→東京都→埼玉県の、沿岸部→多摩丘陵にかけて分布する下吉井式土器や他の条痕文土器の胎土に顕著で、下吉井式土器のメルクマールであるとさえ言われている。これまで県内では、海成粘土が入手できる場所は確認されておらず、また、該期以外の時期の土器にも海綿体骨針が含まれる胎土も確認されていない。つまり県内ではこの早期末という時期の下吉井式という土器にのみ確認されるのであるが、それは、笛子峠を越える事はなく国中地域には及ばなかったのである。あらためて、関東西部と本県東部域、本県東部域と本県国中地域との関係が浮き彫りになったと言えよう。また、石器については、定型的石器はほとんどなく、緑色岩や頁岩などのコアや剥片を用いた礫器がほとんど全てである。このような組み合わせは、近接の都留市中溝遺跡と全く同じであり、この地域の該期の一般的様相と言えるものであろう。

今回住居跡内の土壤を1メッシュのフリイで水洗選別し、第IV章に示したように数種類の炭化種子を得ている。完形で得られたもののほとんどがミズキである。ミズキは中溝遺跡でも残存状態のよかつた5軒すべてから出土し、37点を数える。また、前期後半の御坂町・八代町花鳥山遺跡でも8号住居跡と9号住居跡から203粒が出土しており、とくに8号住居跡からは193粒が検出されている。現在ではミズキを食用とする事例を知らないが、実際にこのように住居跡内からの出土例が増えてくると、何らかの形で種実を利用していたことを想定せざるを得ない。ミズキ利用の民族・民俗例を探る必要がある。

図版1 (1号住居跡 2号住居跡)

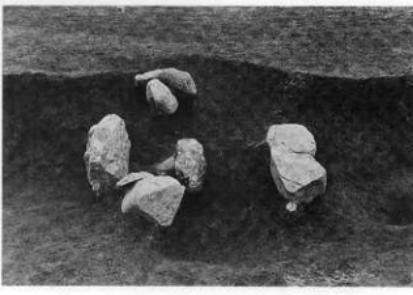


図版2  
(5号住居跡  
6号住居跡)



図版3 (7号住居跡 8号住居跡 土坑)





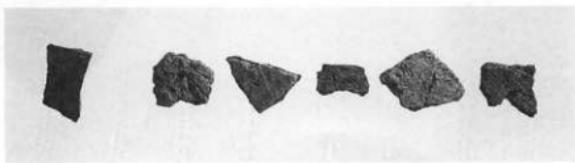
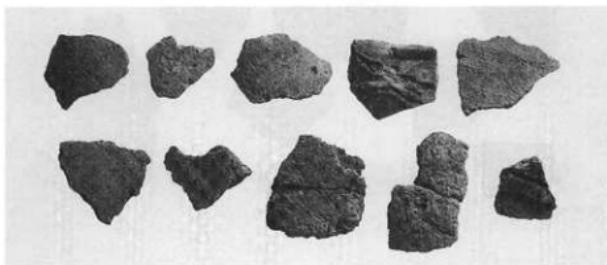
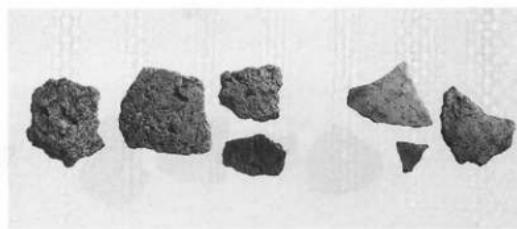
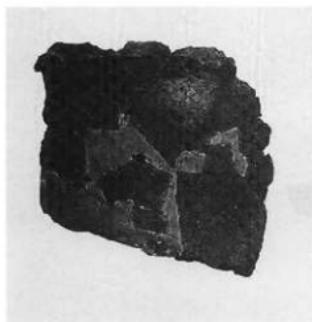
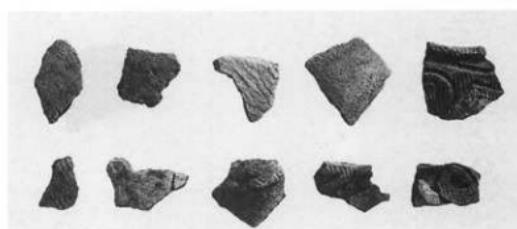
圖版 5 土器（1號住居跡

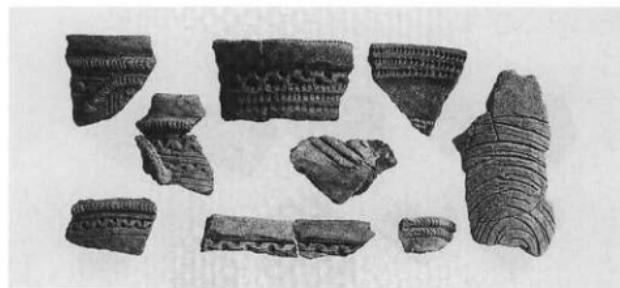
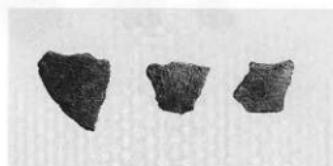
2號住居跡

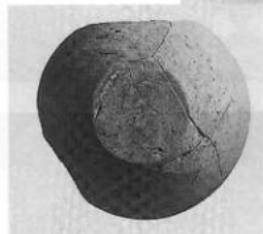
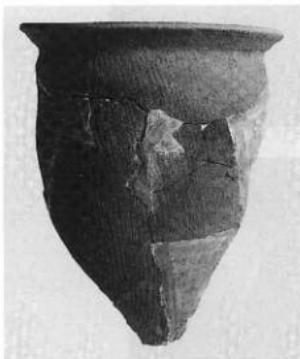
5號住居跡

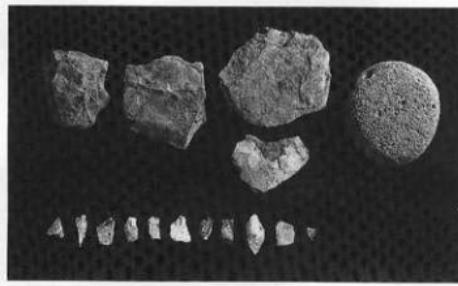
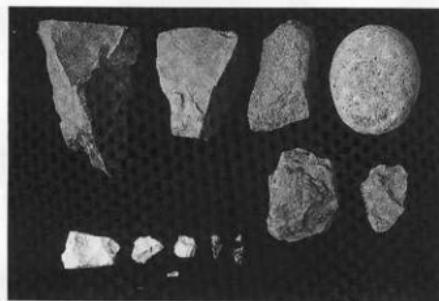
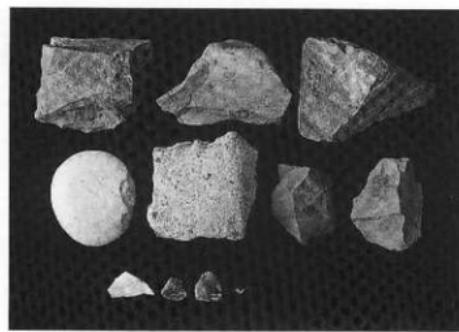
6號住居跡

7號住居跡）

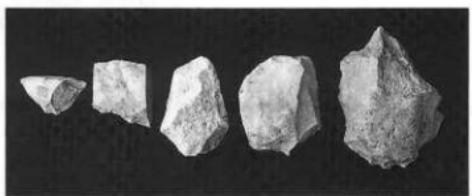
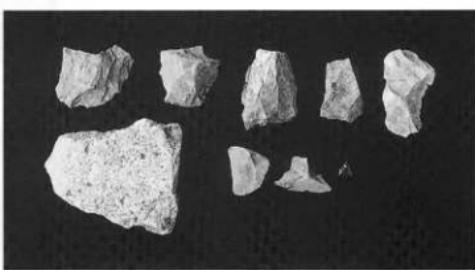
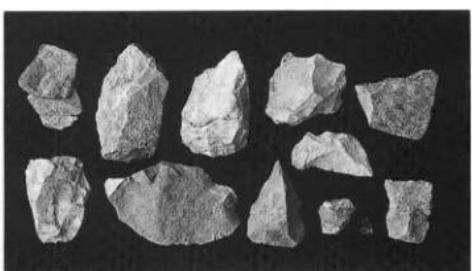








図版9 石器 (7号住居跡 8号住居跡 土坑穀器 グリッド有舌尖頭器 グリッド早期穀器)





1 cm  
(1, 3)

1 cm  
(2)

1 cm  
(4)

1. チヤノキ (試料番号 1)  
2. ミズキ (試料番号 4)  
3. オニグルミ (試料番号 9)  
4. オニグルミ (試料番号 10)

## 報告書抄録

ふりがな	はらだいらいせき
書名	原平遺跡
副題	中央自動車道拡幅工事に伴う事前調査報告書
叢書名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第160集
著者	長沢宏昌・崎田哲・保坂康夫
発行者	山梨県教育委員会・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 055-266-3016
印刷所	株式会社ヨネヤ
発行日	1999年3月25日
所在地	大月市大月町真木779-6番地
地図名・位置	1/25000 大月 東経138°55'00" 北緯35°36'00" 標高420m
主な時代	縄文時代早期・平安時代
主な遺構	住居跡・土坑
主な遺物	縄文時代早期末の土器・石器 平安時代の土器
特殊遺構	
特殊遺物	有舌尖頭器
調査期間	1998年10月1日~12月24日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第160集

## 原平遺跡

発行日 1999年3月25日  
 編集 〒400-1508 東八代郡中道町下曾根923  
 山梨県埋蔵文化財センター  
 ☎ 055-266-3016  
 発行 山梨県教育委員会  
 日本道路公団東京建設局  
 印刷所 株式会社ヨネヤ

